

—— 千葉県市原市 ——

しも が や だい
下 ケ 谷 台 遺 跡

1 9 8 7

市原市都市部農業土木課
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県のほぼ中央部に位置する市原市は、東京湾に面し、首都圏に近接することなどから、昭和30年代後半より臨海工業地帯の建設がはじまり、それを契機として、人口の急増に伴う宅地開発・道路網の整備が進展してまいりましたが、最近でも首都圏のベッドタウンとして、その整備が急がれております。このような急増する土地開発行為は、地域開発と埋蔵文化財保護との調和を強く求めています。

今回報告いたします下ヶ谷台遺跡は、長生郡と境を接する市原市北部の大作地区にあり、周辺は静かな農村地帯でありましたが、この地域にも近年、開発の波が押し寄せつつあります。市原市では、『活力に満ちた豊かなまち市原』をスローガンに市政を推進しておりますが、大作地区の農道整備もその一環としての事業の実施であります。

これがため、実施地区に埋蔵文化財が存在することから、関係諸機関と協議の結果、記録保存の措置を講ずることとなりました。

調査の結果、狭い範囲にもかかわらず多くの遺構・遺物を検出することができ、この地域に古墳時代の集落が営まれたことが明らかとなりました。遺物の中には、東北地方や畿内産と考えられる土器なども見られ、古代の人々の広範な交流を伺えるものであります。

この報告書が研究者のみならず広く市民の方々に活用され埋蔵文化財に対する理解や保護の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にあたって御助言・御協力を賜りました千葉県教育庁文化課・市原市都市部農業土木課・市原市教育委員会・大作町会をはじめ関係各位に感謝申し上げます。

昭和62年 3 月25日

財団法人 市原市文化財センター
理 事 長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市大作字下ヶ谷台101-31番地他に所在する下ヶ谷台遺跡の報告書である。

2. 調査は、市原市（農業土木課）による、大作地区団体営農道整備事業に伴い実施したものである。

3. 発掘調査、整理作業等は以下のとおり行った。

発掘（確認調査）昭和59年11月5日～昭和59年11月30日

（本 調 査）昭和60年2月8日～昭和60年3月24日

整理作業 昭和61年11月1日～昭和62年1月31日

担当 調査研究員 浅 利 幸 一

4. 本書の原稿執筆は、浅利幸一が行った。

5. 発掘調査から整理作業の過程で以下の諸機関から御指導、御協力を賜った。

千葉県教育庁文化課・市原市都市部農業土木課・市原市教育委員会教育指導部文化課。

6. 本書に使用した方位は座標北である。

7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:50,000ちば（N I - 54 - 19 - 15）と、あねさき（N I - 54 - 19 - 16）である。

(財) 市 原 市 文 化 財 セ ン タ ー 組 織 表

昭和59年度（発掘調査）

役 員

理事長 星 野 一 郎（教育委員会教育長）
副理事長 横 濱 辰 夫（教育委員会教育指導部長）
常務理事 井 原 茂（専 任）
理 事 滝 口 宏（早稲田大学名誉教授）
理 事 寺 村 光 晴（和洋女子大学教授）
理 事 海 上 信 久（姉崎神社宮司）
理 事 櫻 井 徹 郎（市企画部長）
理 事 松 崎 良 一（市総務部長）
理 事 中 島 英 夫（市都市部長）
理 事 松 下 隆（市総務部財政課長）
監 事 白 鳥 一 夫（市会計課長）
監 事 山 口 節（教育委員会総務課長）

職 員

庶務課 課 長 小 茶 文 夫
主 事 浅 利 幸 一
主 事 補 相 野 光 江
事 務 員（嘱 託） 秋 田 晴 美
事 務 員（嘱 託） 塚 本 和 江
調査課 課 長 郷 田 良 一
主任調査研究員 山 口 直 樹
調 査 研 究 員 宮 本 敬 一
調 査 研 究 員 米 田 耕 之 助
（兼）調査研究員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 近 藤 敏
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真
調査研究員（嘱託） 鈴 木 英 啓
事 務 員（嘱 託） 高 浦 貞 子

昭和61年度（整理事業）

役 員

理事長 星 野 一 郎（教育委員会教育長）
副理事長 横 濱 辰 夫（教育委員会教育指導部長）
常務理事 岩 見 一 民（専 任）
理 事 滝 口 宏（早稲田大学名誉教授）
理 事 寺 村 光 晴（和洋女子大学教授）
理 事 海 上 信 久（姉崎神社宮司）
理 事 松 崎 良 一（市企画部長）
理 事 斎 藤 栄 亮（市総務部長）
理 事 地 引 希 壺（市都市部長）
理 事 松 下 隆（市総務部財政課長）
監 事 白 鳥 一 夫（市会計課長）
監 事 斎 藤 崇 雄（教育委員会総務課長）

職 員

庶務課 課 長 田 丸 萬 富
主 事 補 大 鐘 光 江
事 務 員（嘱 託） 秋 田 晴 美
事 務 員（嘱 託） 藤 澤 ひ と み
事 務 員（嘱 託） 石 渡 あ ゆ み
調査課 課 長 清 藤 一 順
主 幹 石 田 広 美
主 幹 山 口 直 樹
主任調査研究員 宮 本 敬 一
主任調査研究員 米 田 耕 之 助
調 査 研 究 員 田 中 清 美
調 査 研 究 員 浅 利 幸 一
調 査 研 究 員 大 村 直
調 査 研 究 員 近 藤 敏
調 査 研 究 員 高 橋 康 男
調 査 研 究 員 田 所 真
調 査 研 究 員 木 對 和 紀
調査研究員（嘱託） 田 中 新 史
調査研究員（嘱託） 半 田 堅 三
調査研究員（嘱託） 鈴 木 英 啓
事 務 員（嘱 託） 高 浦 貞 子
事 務 員（嘱 託） 長 谷 川 い づ み

本文目次

序文

理事長 星野一郎

例言

(財)市原市文化財センター組織表 (昭和59年度調査, 昭和61年度整理)

第1章 序説	1
Ⅰ 遺跡の調査に至る経緯と経過	1
Ⅱ 遺跡の立地と環境	1
第2章 検出された遺構と遺物	7
Ⅰ 住居跡と出土遺物	7
第1号住居跡	7
第2号住居跡	9
第3号住居跡	14
第4号住居跡	21
第5号住居跡	23
第6号住居跡	27
第7号住居跡	30
Ⅱ 遺物観察表	32
第3章 まとめ	40

挿 図 目 次

第1図	下ヶ谷台遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	第14図	3号住居跡出土遺物実測図(2)
第2図	下ヶ谷台遺跡周辺の地形図	第15図	3号住居跡出土遺物実測図(3)
第3図	下ヶ谷台遺跡全体図	第16図	3号住居跡出土遺物実測図(4)
第4図	1号住居跡実測図	第17図	4号住居跡出土遺物実測図
第5図	1号住居跡出土遺物実測図	第18図	5号住居跡実測図
第6図	2号住居跡実測図	第19図	5号住居跡カマド実測図
第7図	2号住居跡カマド実測図	第20図	5号住居跡出土遺物実測図(1)
第8図	2号住居跡出土遺物実測図(1)	第21図	5号住居跡出土遺物実測図(2)
第9図	2号住居跡出土遺物実測図(2)	第22図	6号住居跡実測図
第10図	2号住居跡出土遺物実測図(3)	第23図	6号住居跡出土遺物実測図(1)
第11図	3・4号住居跡実測図	第24図	6号住居跡出土遺物実測図(2)
第12図	3号住居跡カマド実測図	第25図	7号住居跡・カマド実測図
第13図	3号住居跡出土遺物実測図(1)		

図 版 目 次

図版1	下ヶ谷台遺跡周辺の航空写真	図版9	上・6号住居跡遺物検出状況
図版2	上・下ヶ谷台遺跡遠景（東から）		下・7号住居跡全景（西から）
	下・確認調査風景	図版10	1号住居跡出土遺物（1～2）
図版3	上・1号住居跡全景（東から）		2号住居跡出土遺物（1～17）
	下・1号住居跡遺物出土状況	図版11	2号住居跡出土遺物（18～29）
図版4	上・2号住居跡全景	図版12	3号住居跡出土遺物（1～10）
	下・2号住居跡カマド検出状況	図版13	3号住居跡出土遺物（11～19）
図版5	上・3・4号住居跡全景（南から）	図版14	3号住居跡出土遺物（20～26）
	下・3・4号住居跡遺物検出状況	図版15	3号住居跡出土遺物（27～33）
図版6	上・3号住居跡カマド調査状況	図版16	4号住居跡出土遺物（1～11）
	下・5号住居跡全景（南から）	図版17	5号住居跡出土遺物（1～17）
図版7	上・5号住居跡土層堆積状況	図版18	6号住居跡出土遺物（1～12）
	下・5号住居跡カマド調査状況	図版19	6号住居跡出土遺物（13～24）
図版8	上・6号住居跡全景（南から）		
	下・6号住居跡遺物検出状況		

第1章 序 説

I 調査に至る経緯と経過

市原市北東部の湿津地区大作における、大作地区団体営農道整備事業の着工にさきがけ、昭和58年6月9日付けで、市原市長井原恒治より、事業地域内の埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長宛に提出された。それを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会の現地路査により、昭和58年7月8日付けで「土師散布地1ヶ所」の回答がなされた。回答により、千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会文化課・市原市都市部農業土木課の三者により協議の結果、記録保存とする方針が決まった。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの委託事業として、対象面積2700㎡の確認調査を昭和59年11月1日より実施した。確認調査の結果、対象地域内の西と北側半分の800㎡が本調査の対象となり、昭和60年2月1日より実施した。

整理作業は、昭和61年10月1日から開始し、62年3月31日をもって終了した。

II 遺跡の立地と環境

下ヶ谷台遺跡は、千葉県市原市大作字下ヶ谷台に所在し、今回の調査区域は下ヶ谷台101～31番地の一部分にかかる。

市原市は、千葉県の房総半島の中央部より東京湾岸に至る南北35km・東西11～22kmを測る南北に長く、南部は山間部・北西部は海岸平野に面し、古代より山海の幸に恵まれた地域で、市内には縄文時代後期～晩期の「西広貝塚」・弥生時代中期の環濠集落の「大厩遺跡」・出現期古墳の「神門古墳群」・大型前方後円墳の姉崎二子塚を代表とする「姉崎古墳群」・奈良～平安時代には「上総国分僧・尼寺」が建立され上総の国の中心地とも言える「国分寺台遺跡群」など各時代を代表する遺跡が所在し、この他にも市内各所には多数の遺跡が点在している。

市原市の北辺に、かつて上総と下総の国境を西流して東京湾に注ぐ村田川が流れ、別名「境川」とも言われ、現在はほぼ千葉市と市原市の境をなしている。村田川は、中流域で二本の支流が合流し東京湾に注ぐが、一方は長生郡七里野方面より発源し西流する草刈川で、一方は長生郡長柄町柄山の山間に発源し、荻作に至り勝間・武士方面より流れ出る小支流と合流し北流する神崎川がある。

下ヶ谷台遺跡は、この神崎川上流の小支谷に挟まれた台地上に位置し、標高70～75mほどの平坦な台地上にある。水田面からの比高差は約25mを測る。この台地は基部を東側に有し、南・北は神崎川小支流によって開析された小谷により西に舌状に突出して作り出されている。南北300m・東西1600mを測り、平埧で西に向って高さ・幅を減じていく。台地上には、東側基部より今回の調査区域までの東側半 若干の土師器が散布し現在は畑地で、西側半分は山林で先端部は前方後円墳・円墳・方墳などからなる「七塚古墳群」が所在する。

神崎川流域の発掘調査は、周辺の村田川中流域右岸の千原台地区・村田川河口左岸の菊間地区および養老川河口右岸の国分寺台地区と比較すると隔絶の感がある。しかしながら、先学諸氏により幾つかの重要な遺跡が調査され成果が報告されている。

武士遺跡⁽¹⁾は、神崎川西端支流の最深部に在り、台地西側は養老川に面している。周辺では建市廃寺や勝間遺跡⁽²⁾などが知られ、建市神社⁽³⁾については三代実録の元慶年間の記載があり従五位下を賜っており、鋸齒文縁複弁蓮花文鍔瓦と深頸三重弧文字瓦が出土しており、国分寺に先行する時期の建立と考えられている。武士遺跡からは弥生後期や縄文時代中期～後期の住居跡を検出しており、勝間遺跡からは縄文時代中期～後期の住居跡20数軒が検出されている。

小田部地区では、小田部小谷吹上遺跡⁽⁴⁾・小田部新地遺跡⁽⁵⁾・小田部古墳⁽⁶⁾があり、前二者は神崎川中流域左岸に後者は右岸台地上に占地する。小田部小谷吹上遺跡からは縄文時代中期の土壌約150基・住居跡11軒・鬼高期の住居跡2軒などを検出している。小田部新地では、縄文時代中期阿玉台の住居跡3軒・弥生中期～後期の方形周溝墓14基・中期の住居跡2軒・古墳時代では土壌墓3基・住居跡8軒・五世紀代の円墳と方墳各1基ずつ検出しており、この内土壌墓から沓形珠文鏡一面が出土し注目される。また、小田部新地遺跡の対岸の台地上に位置する小田部古墳では1基を調査し、径23mの円墳の主体部からガラス小玉約300・管玉3点が出土し、ガラス玉の詳細な検討がなされている。また、墳頂部より一括して出土した高杯に注目し、櫛描き平行直線文と篋描き連続山形文からなる土器表面の施文技法や、その形態から東海地方西部における元屋敷式土器と対比され、4世紀代の築造とされる。小田部新地の下流に隣接して占地する荻作古墳では1号墳を調査し、主軸長28mの前方後円墳であることが確認され、粘土床を内部施設とし直刀一振・鉄鏃5個体が破碎して出土し、6世紀後半を上限とする後期古墳であることが解明されている。東京電力変電所の所在する神崎川中流域右岸の台地上では祭り野遺跡⁽⁷⁾が調査され、調査面積340㎡と小範囲にかかわらず住居跡7軒・土壌4期を検出し、当台地上の遺跡の密なるを推察することができる。住居跡は弥生後期1軒・古墳時代6軒で、出土遺物から4世紀～6世紀代の時期のものが所在する。

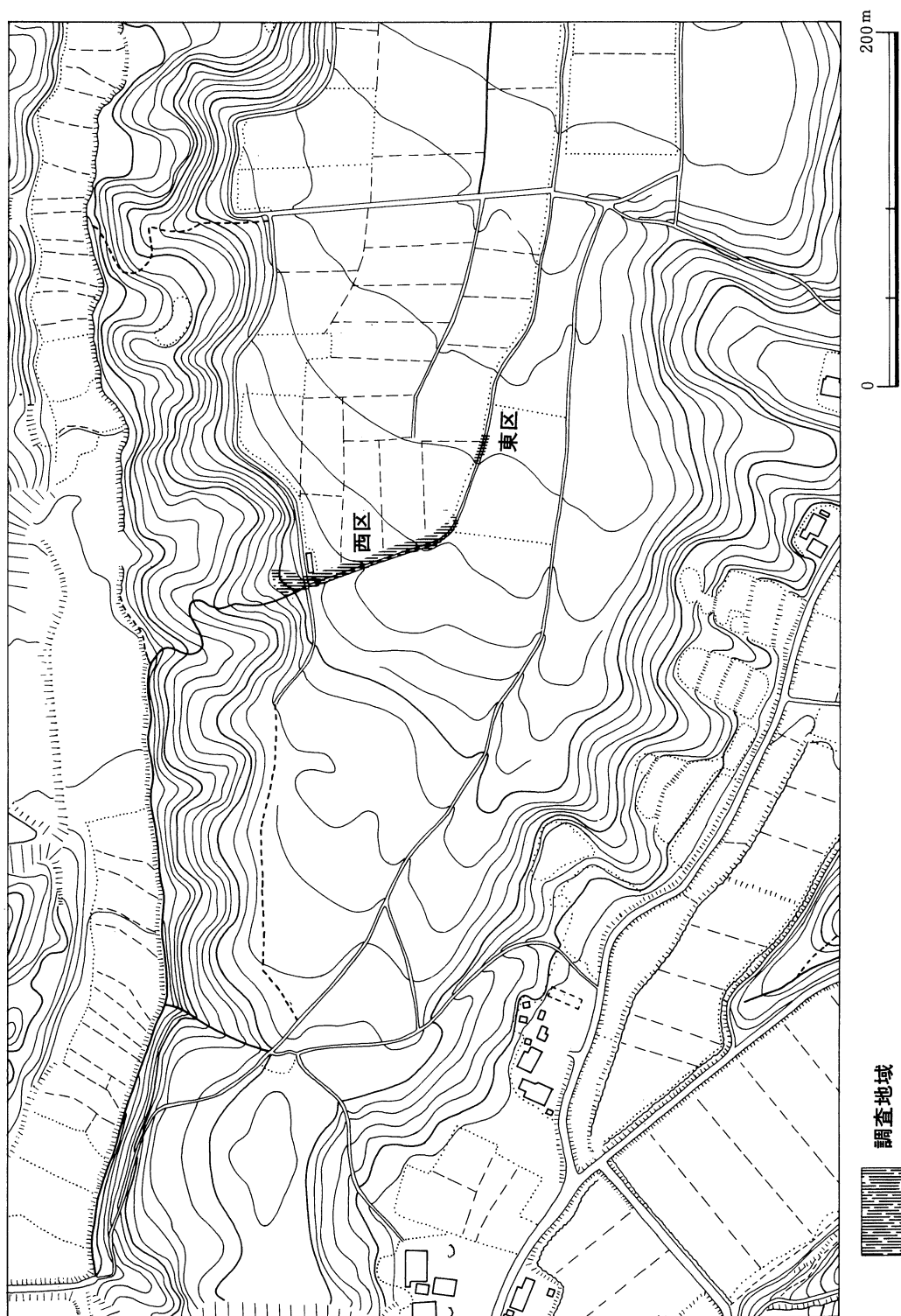
神崎川が草刈川と合流する村田川中流域では、神崎川右岸の村田川に面する低位台地上に位置する西山遺跡⁽⁸⁾、左岸の大厩地区では大厩遺跡⁽⁹⁾と大厩浅間様古墳が調査されている。西山遺跡

では、縄文時代の落し穴7基・弥生時代住居跡1軒とV字状の環濠・古墳時代の住居跡24軒・奈良～平安期の掘立柱建物跡1棟・四脚門をともなう柵列を検出し、弥生中期の環濠集落の存在や奈良～平安期の四脚門をともなう柱列の検出は注目を集め、また古墳時代前期の住居跡より出土した石製垂飾品は貴重である。大厩遺跡は、村田川とその支流である神崎川の合流地点の西側台地上に在り、調査は南側半分が行なわれた。弥生中期の住居跡36軒とそれを包括するV字溝が検出され、環濠集落跡である。また弥生時代の集落は後期まで続き、13軒がさらに調査される。古墳時代では、住居跡が14軒・鬼高期が11軒と最も多い。古墳は9基を調査し、3・5・9号墳の3基が五領期・6～8号墳が和泉期・1・2・4号墳が終末期古墳である。特に張り出しを有する9号墳の方墳からは、東海地方西部の元屋敷式土器のS字状口縁の台付甕が出土し、上流域の小田部古墳との関連が注目される。大厩浅間様古墳は大厩遺跡の北側の同台地上に位置し、村田川に面して占地する。墳丘長45～50mの円墳と考えられ、埋葬施設を3基検出し、特に1号主体部からは珠文鏡1面・石釧1点・刀子1・瑪瑙製勾玉2・琥珀勾玉7・管玉53・ガラス勾玉1・ガラス小玉31・琥珀棗玉4・琥珀小玉19などを出土し、墳丘より出土した焼成前底部穿孔孔の小片より考え4世紀末を中心とした築造時期が考えられる。

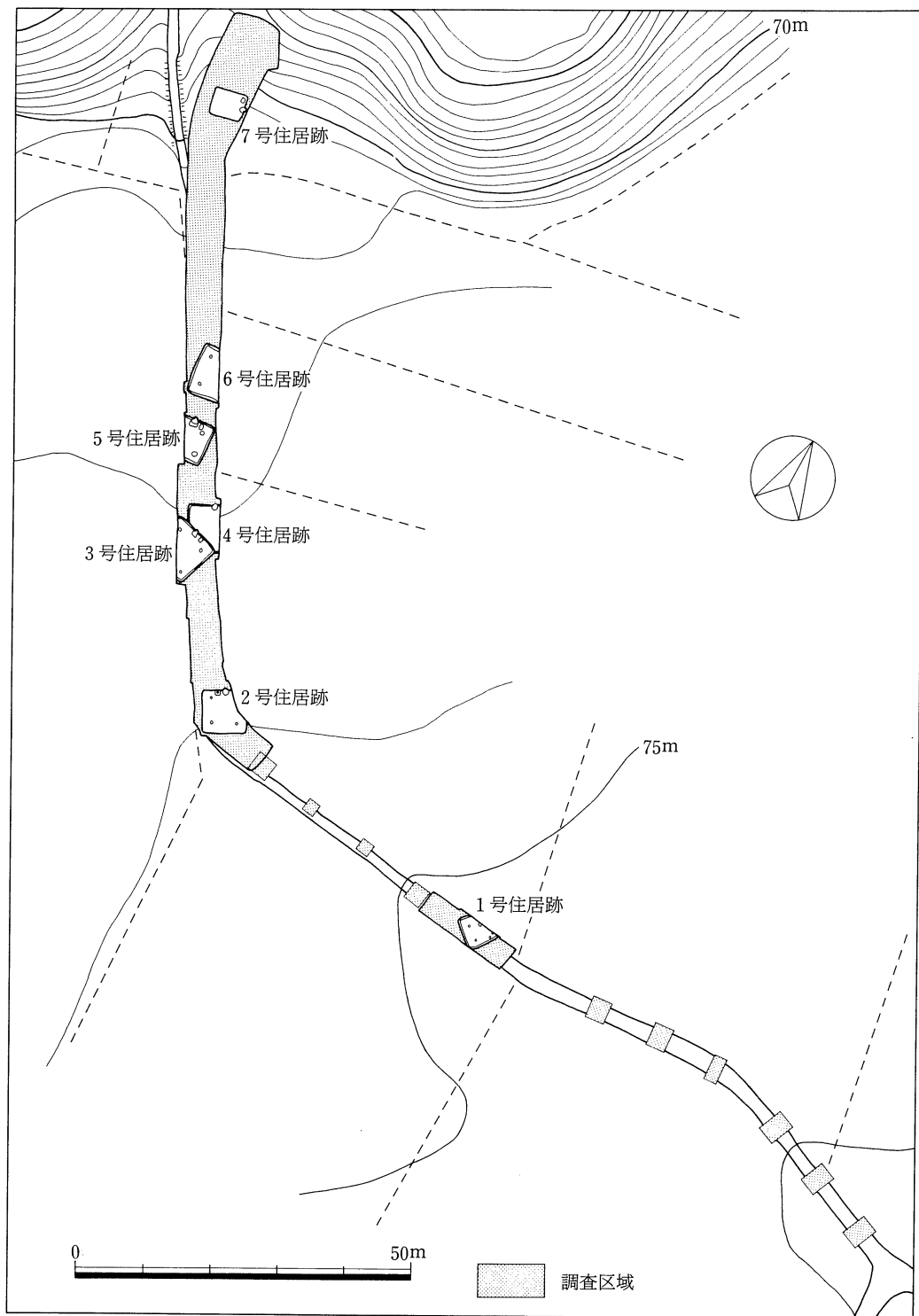
神崎川流域の考古学上の調査は僅かにすぎないが、先学諸氏により数々の調査成果を生みだしている。しかしながら、このような成果もこの地域における歴史から見るならば氷山の一角と言えよう。近年この地域における環境の変化は著しい現況にあり、特に上流域における廃棄物処理場や土取りによる、遺跡や自然環境の破壊は目にあまるものがある。たとえ僅かな面積であっても自然環境を変えることは、未来を考慮したものでなければならず、環境を変えようとする者は、あらゆる方面より環境を記録する責務を負わなければならない。

今回の下ヶ谷台遺跡の調査は、道路と言う小範囲にもかかわらず数多くの先人達の遺産である、遺構・遺物を検出することができ、ここにその報告をするものである。

- 註(1)．半田堅三他「武士遺跡」武士遺跡発掘調査団 1976年3月
(2)．1973年夏に平野元三郎氏が調査。実見による。
(3)．田中清美「小田部小谷吹上遺跡」能満小田部線埋蔵文化財発掘調査団 1979年
(4)．山口・森本・近藤「市原市文化財センター年報・小田部新地遺跡」(財)市原市文化財センター 1983年7月
(5)．杉山・安藤・沼沢・田中・小田「千葉県市原市小田部古墳の調査」古墳時代研究会 1972年6月
(6)．1977年春から夏に田中清美氏が調査。田中清美氏の御教示による。
(7)．鈴木英啓「潤井戸西山遺跡」(財)市原市文化財センター 1986年3月
(8)．三森・阪田・沼沢・矢戸・菊地「市原市大厩遺跡」(財)千葉県開発公社 1974年
(9)．浅利・田所「市原市文化財センター年報」(財)市原市文化財センター 1985年



第2図 遺跡周辺の地形図



第3図 下ヶ谷台遺跡全体図

第2章 検出された遺構と遺物

今回の調査は、下ヶ谷台遺跡の所在する台地のほぼ中央部に位置し、また約 300mの長さで試掘が出来たことは、農道と言う狭い道幅の調査であったにもかかわらず、数多くの遺構・遺物の検出を見、大づかみではあるが当台地上の歴史の一端を垣間見た感がある。

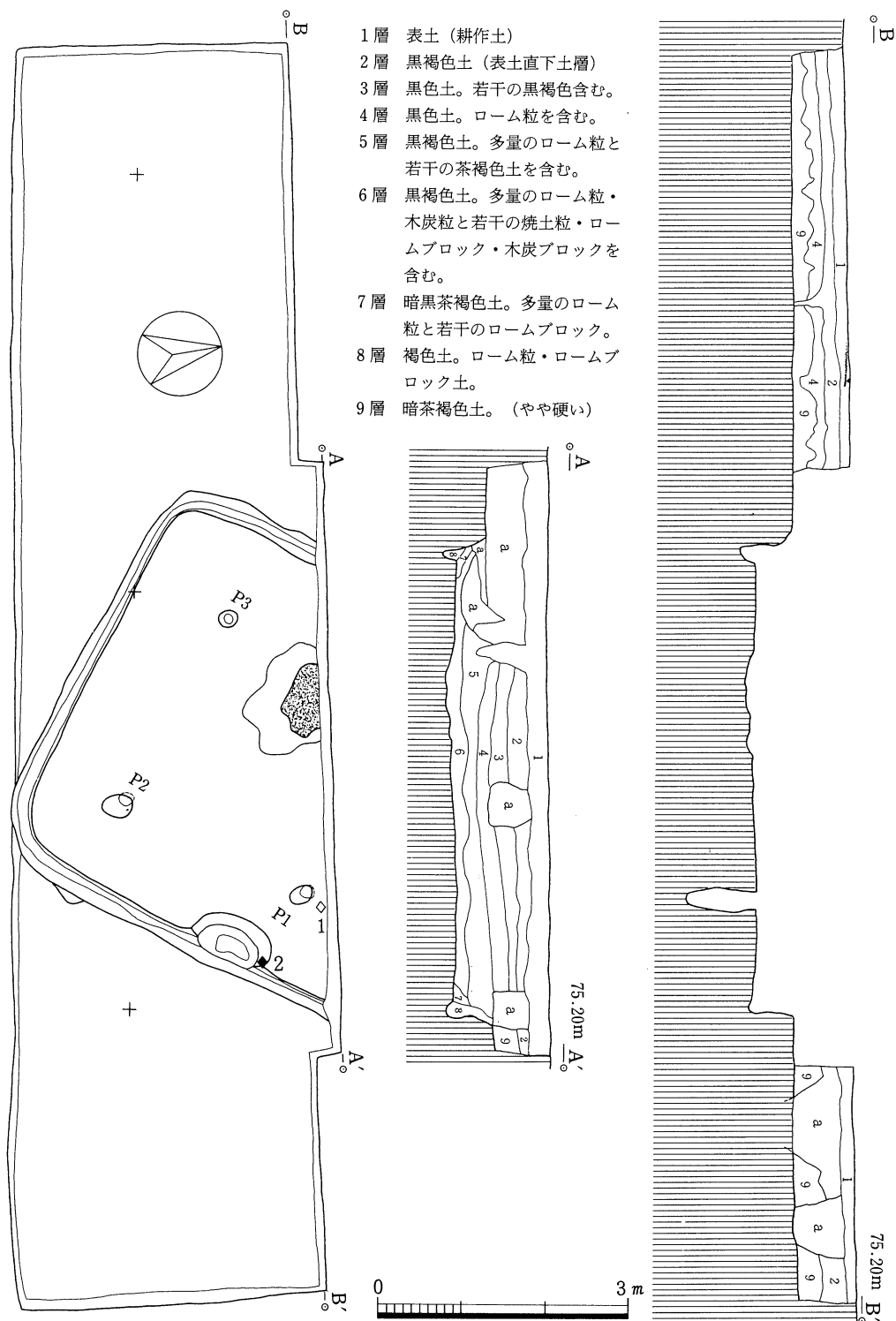
序説で申し上げたように、台地は東から西にのび、全長約1600m・東側に基部を有し基部幅 300m・調査地点の中央部付近で約 250m・先端部近くで市道に切り通され地形の改変があり、先端部は北に折れ曲るようにして終り独立台地状を呈している。水田面との比高差は、東側基部で24m・中央で30m・先端で25mほどで、台地上標高は東より85m・中央部75m・先端で60mをそれぞれ測り、東から西に向って緩やかに傾斜する。

現況は、台地南側縁辺の下に道幅 4 mほどの道が在り、東側で主要地方道千葉・茂原線と交わり、所々に民家が建つ他は台地縁辺部は雑木林に被われ、台地上は調査区より東側は畑地で、西側隣接地が杉林に被われ、それより西側の先端部は民家や雑木林・畑地がまばらに存在している。考古学的には、東側畑地に希薄ながら土師片や縄文土器片が見うけられ、その地下の存在を思わせるが、近年この畑地は所々で黒土の入れ変えがおこなわれかならずしも良好な状況ではない。西側は立木に被われる為不明だが、杉林の隣接地に小字で武勇・武勇柳台^{ぶゆう やなぎだい}の地名が在り、土塁状の土の盛り上がりが方形にとぎれながら巡り興味深い。また、台地先端部には前方後円墳・円墳・方墳などの墳形の古墳数基からなる「葉木古墳群」が所在している。

本調査は、2 地点に分かれ、東区は幅3.75m・長さ15.1m、西区は南北に長く幅 6 m前後・長さ 100mにわたって行なった。東区では古墳時代前期の住居跡 1 軒、西区では 7 軒の住居跡を調査し、3・4号住居跡が切り合っている他は複合はない。2～6号住居跡は古墳時代後期の住居跡で、北端の 7号住居跡は奈良～平安時代の所産と考えられる。

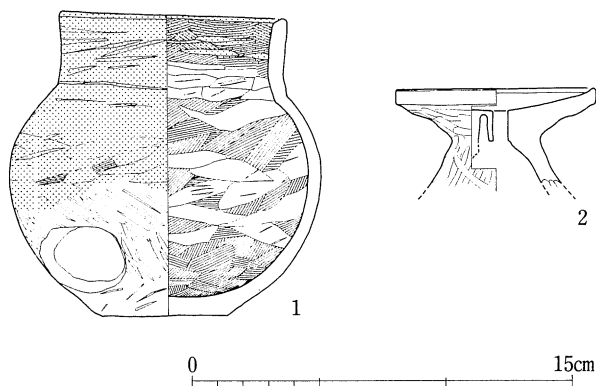
1号住居跡 (第4図)

東区より検出され、全体の3/5 ほどの調査で、北側半分は調査区域外に在る。主軸方向は、N-53°-Wを指向する。平面形は、北半分が未調査であるが、一辺 5.1mほどの隅丸方形のプランを呈するものと考えられる。ソフトローム面からの掘り込みは、東側49cm・南隅48cm・西隅43cmを測る。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれる。壁溝も四周し、完周するものと推測でき、深さ12～25cm前後を測りやや深い感がある。炉跡は、中央よりやや北西に寄って設け、焼土は長軸で80cmの範囲に比較的良好な状態を保ち、炉周辺に焼土塊粒の散らばる軟弱な床面を検出する。床は主柱穴の内側が硬く踏み堅められるが、壁寄りには張り床される部分も多くやや軟弱な



第4図 1号住居跡実測図

床となる。柱穴は3ヶ所検出し、
四本柱の竪穴住居跡である。深さは、
P1-84cm・P2-63cm・P3-58cmを測る。
柱穴間はP1-P2で2.4m・P2-P3は2.5mである。
東壁に接して掘り込まれるピットは、
長径1m・短径0.56m・深さ0.24mで、
播り鉢状を呈し、覆土は黒色土に
ローム粒とロームブロックを混入し、
やや軟弱な土質である。



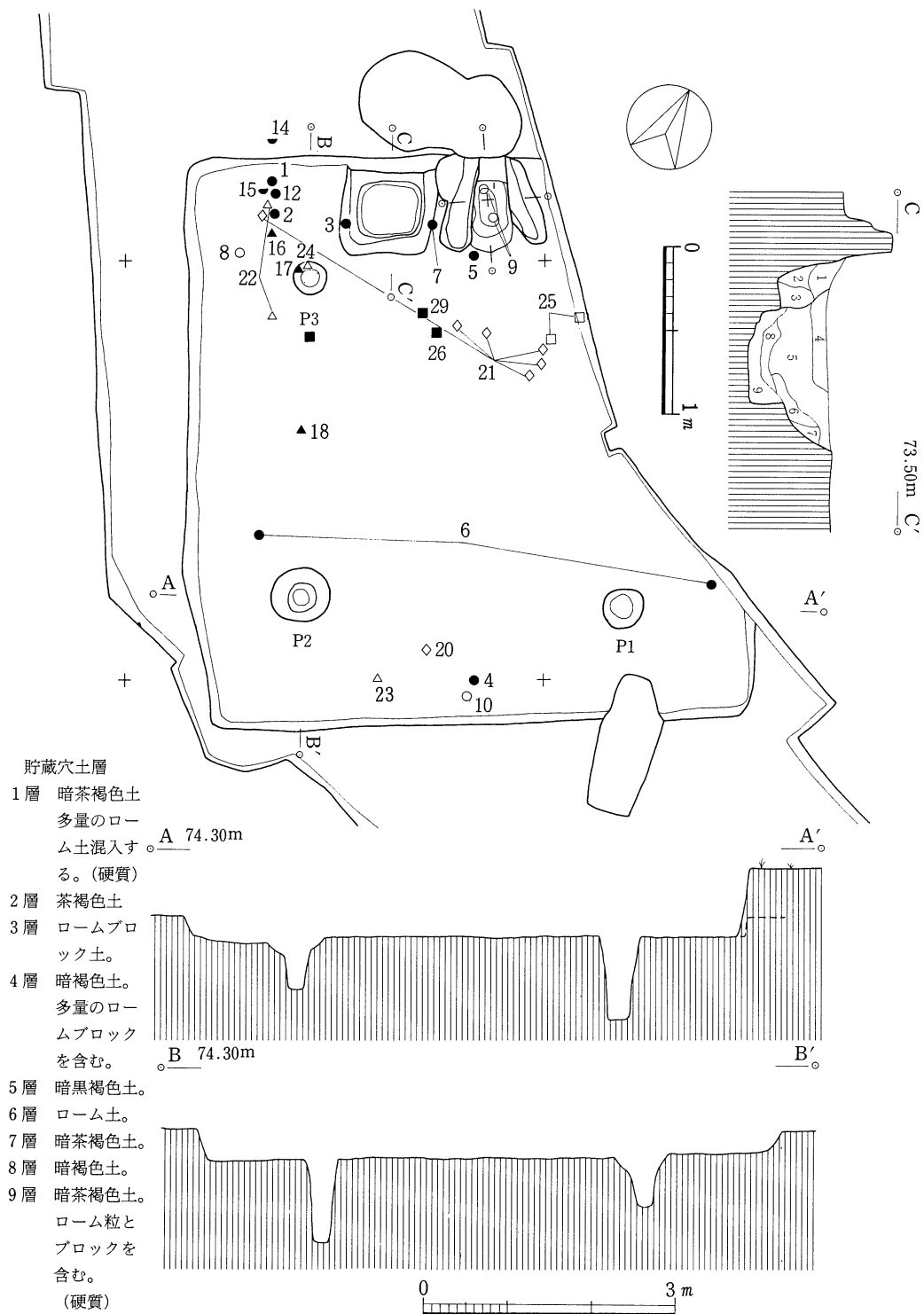
第5図 1号住居跡出土遺物実測図

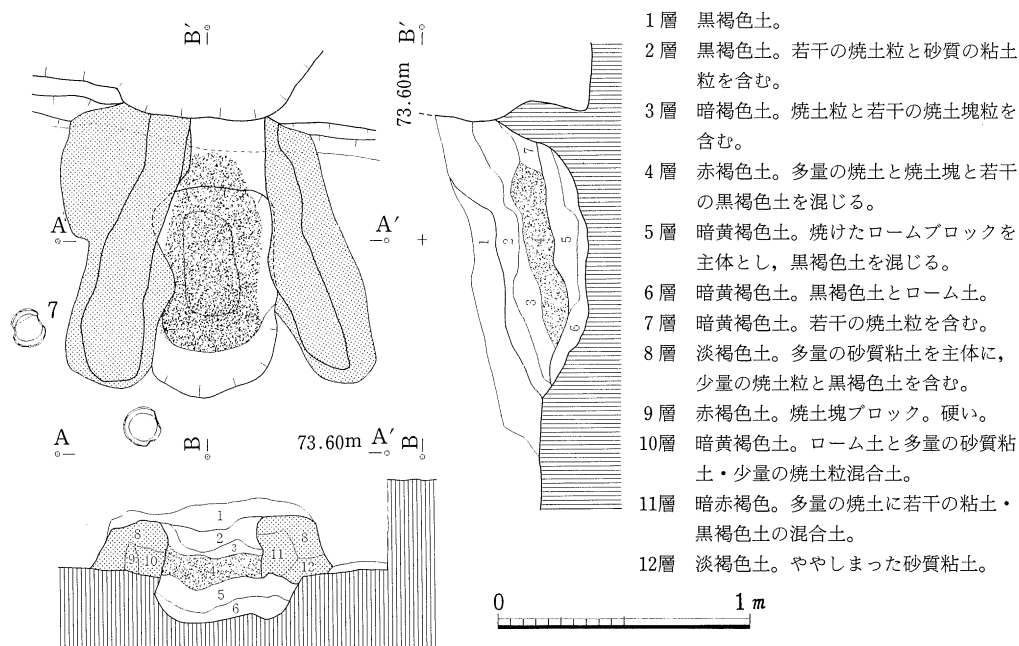
住居跡覆土は、表土より確認面までのソフトロームで厚さ67~74cmを測る。
表土直下の第2層下部よりすでにレンズ状に堆積し、
本来の掘り込み深さは70cm以上に達すると考えられる。
覆土最下層中には、木炭粒や焼土粒が多く混入し、
床面上にも若干の木炭が散見することから、
火災住居跡とも考えられる。床面の標高は、
今回の調査住居跡中最高位の、標高73.9mを測る。

出土遺物は、土師器片数十点で、すべて小片で図示できない。
1・2はそれぞれ床面直上よりの出土である。
双方共やや雑な作りである。1は、胴部より上半分と口縁内面に丹彩を施し、
胴下半に二次的に孔が穿たれている。2は器台で、中央の孔は2ヶ所に穿たれ一方はふさがれている。
(第5図)

2号住居跡 (第6・7図)

西区の最南端に、北西隅を大きく調査区域外に置き検出し、
全体の4/5ほどを調査することができた。主軸方位は、N-30°-Wを指向する。
平面形は、一辺6.75mほどのやや形のくずれる方形を呈する。
ソフトローム面からの掘り込みは、南東隅39cm・南西隅26cm・北西隅37cmを測る。
壁はやや傾斜し掘り込まれるものの、ほぼ垂直である。
床面は、やや凹凸が目立つが、ほぼ平坦で、
主柱穴内側とカマド周辺が硬く、壁寄りはやや軟弱な感があり、張り床される。
壁溝は、無い。主柱穴は3ヶ所から検出したが、
本来は四本柱であろう。深さは、P1-121cm・P2-56cm・P3-98cmで、
柱穴間はP1-P2 3.9m・P2-P3 3.8mを測る。
カマドは、北壁の中央に設け、
煙導部は円形のイモ穴により大きく削り取られている。
左右の軸部は壁より1mほどの長さがあり、
やや長目の感があり、カマド構築土はやや粘質の弱い褐色の砂質粘土を用いている。
焚口とカマド内には焼土が充満しているものの、
内壁はさほど硬くない。カマド右側の貯蔵穴状のピットは、
平面形1.1mほどの方形で、深さ45.5cmを測り、
中段に段を有している。





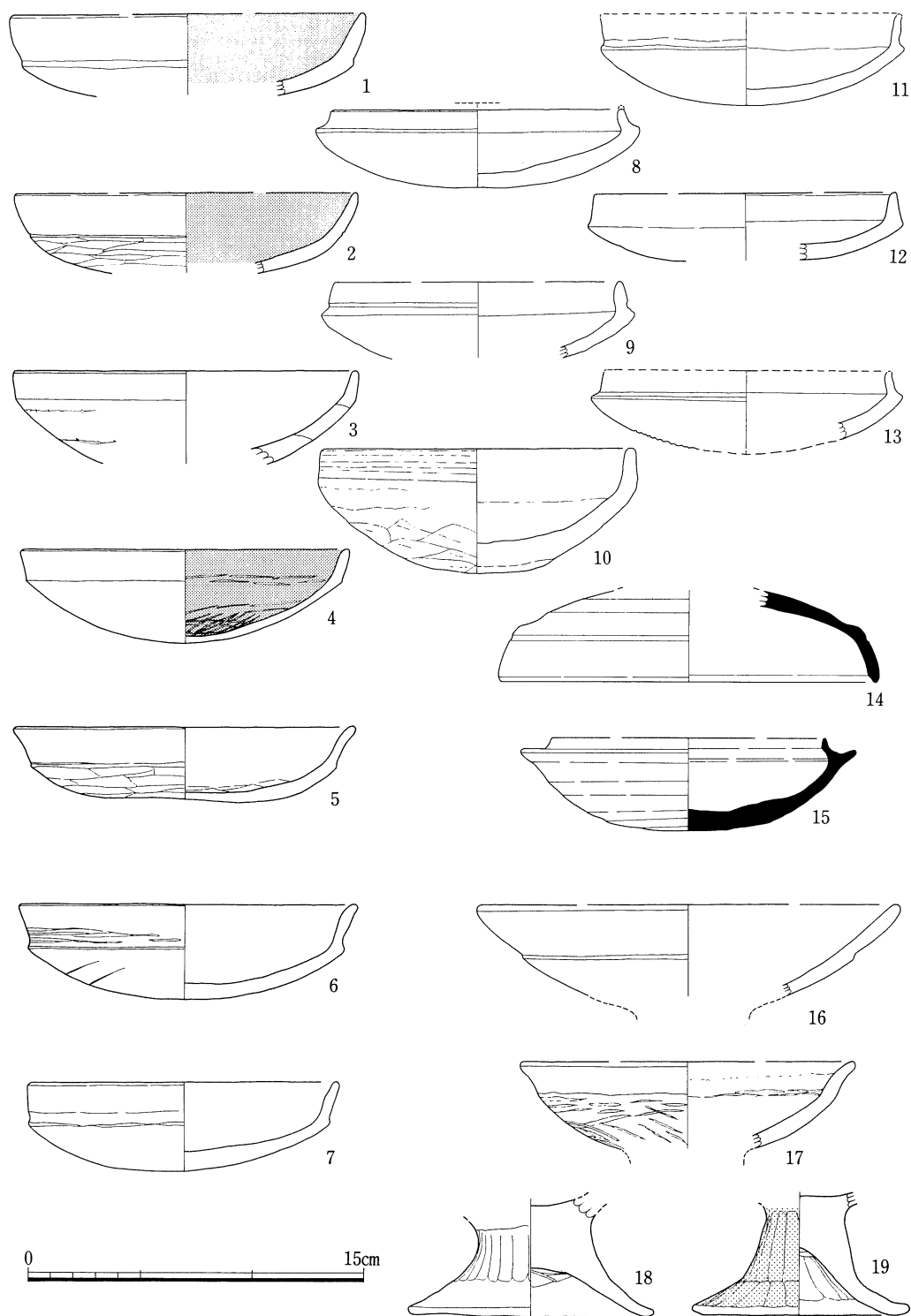
第7図 2号住居跡カマド実測図

床面標高は、72.95mを測る。

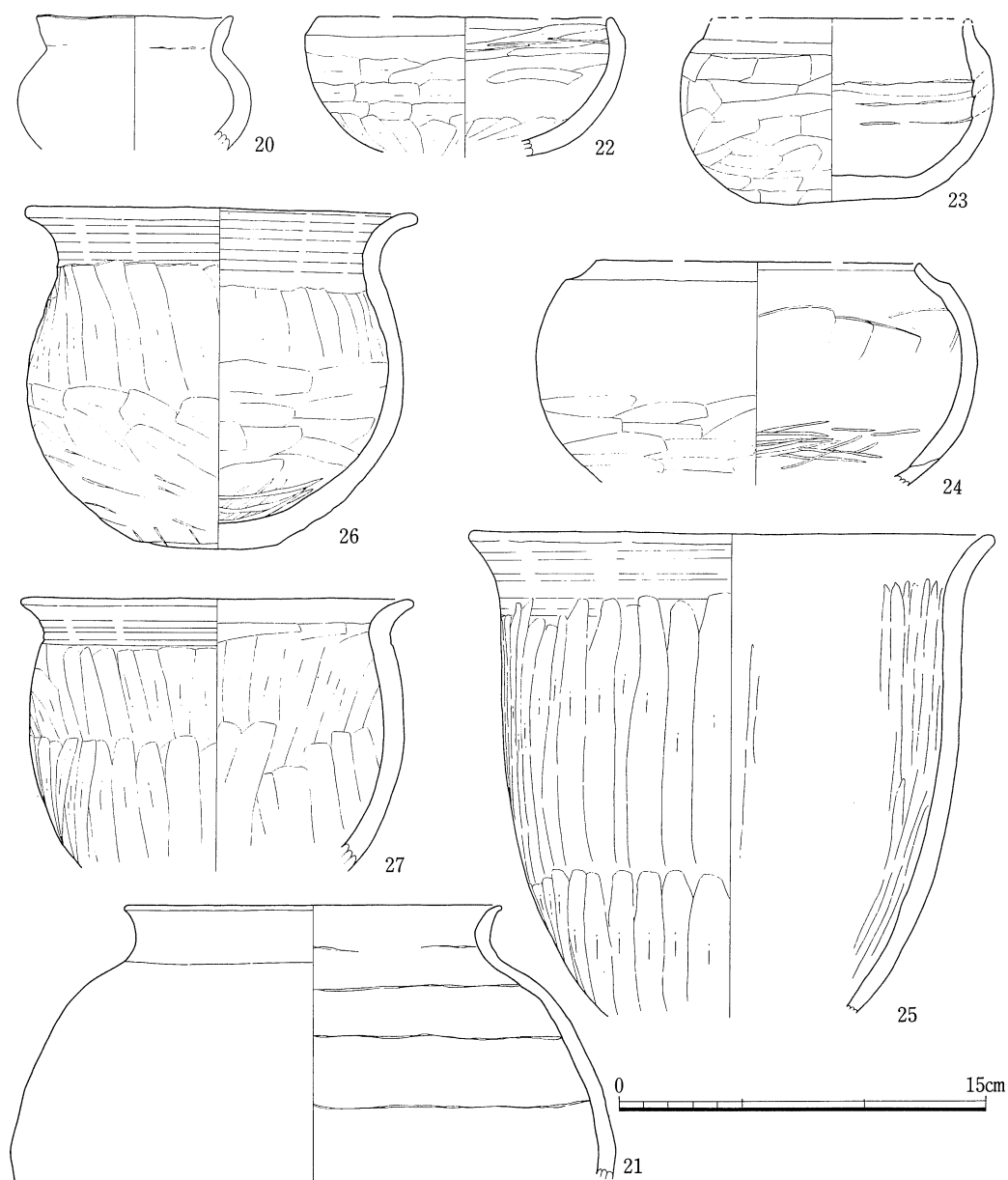
出土遺物 (第8・9・10図)

床面および北西隅より投げ込まれた状況で、比較的多量の遺物を出土する。4・5・7・9・17・18・20・23～26・28・29が床面直上、もしくは出土状況から当住居跡の帰属と考えられる遺物で、1～3・8・12・15～17・22は北西隅より投げ込まれ出土する一群である。後者は、住居跡廃絶後に投げ込まれる遺物であるが、当住居跡の帰属する時期に含めて考えても差し支えないものであろう。

1～13は土師器杯で、1～7は体部に稜を有したり丸底の底体部から立ち上がる外傾する口縁を特徴とし、8・9・11～13は体部に受部状の稜を有し内傾する口縁を特徴としている。10は、粘土紐巻き上げによる、輪積痕を残し、肉厚で他の土師器杯と比べ雑な感がある。14・15は須恵器蓋杯で、14は蓋杯・15は蓋杯の身である。14は、天井部を欠き全体の $\frac{1}{4}$ ほどの遺存で、推定径17cmとやや大ぶりで、やや肩が張り、口縁直下に浅い沈線を有し、天井部篋削は丁寧である。15も全体の $\frac{1}{4}$ ほどの遺存で、口径約12.2cm・最大径15cmを測り、底部篋削はわずかで雑である。16～19は高杯で、16・17は高杯杯部で、 $\frac{1}{4}$ ほどの遺存である。16は、体部外面に段状の稜を有し、やや丁寧な仕上がりで、17は雑な作りである。18・19は脚で、19の外面は丹彩を施している。21は短頸の土師器壺で、カマド手前の覆土中より散在し出土している。短か目の

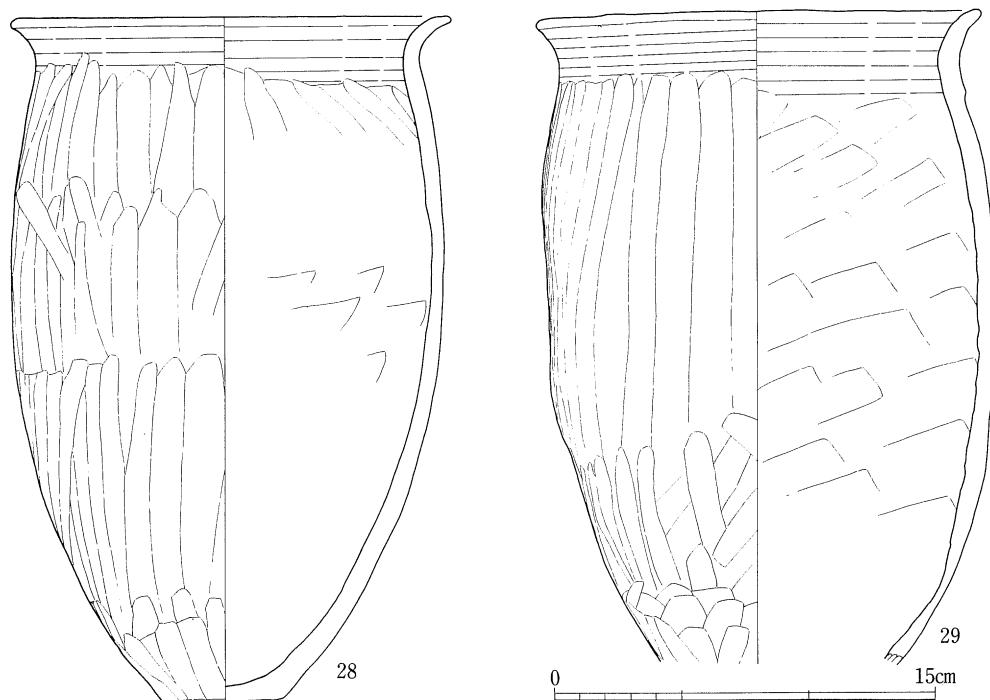


第8図 2号住居跡出土遺物実測図(1)



第9図 2号住居跡出土遺物実測図(2)

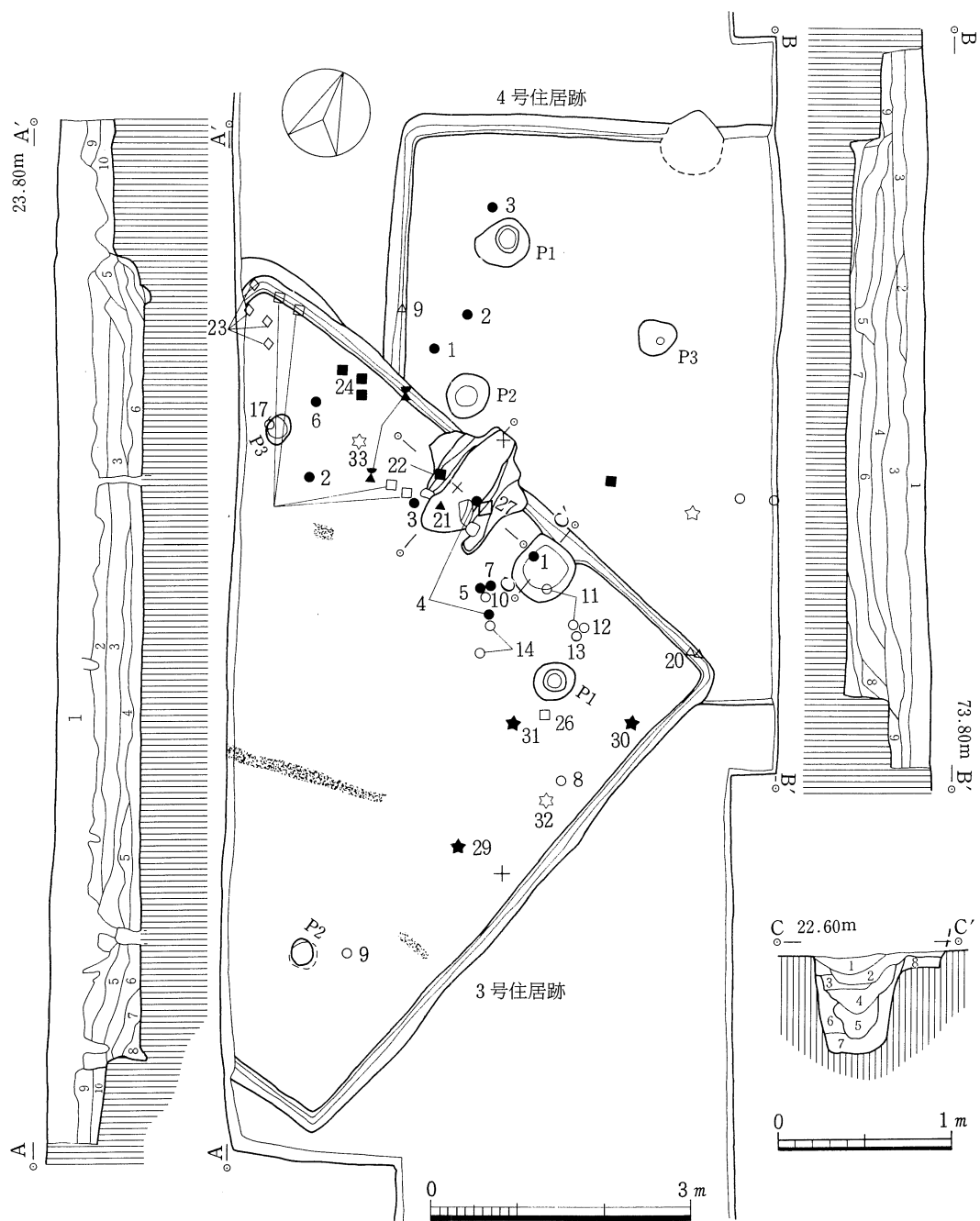
僅かに立ち上がる口縁端部はシャープにつまみ上げ強く外反する。外器表面に僅かに丹彩の痕跡をとどめ、当地域の遺物としては希薄な存在と言える。24は、球状の体部を呈する椀で、22・23と器形を異にし一概に比較はできないが、口縁はコ字状にシャープに仕上げられ、口縁直下に強い横ナデによる稜を有し、丁寧な作りである。25は土師器甕・26～29は土師器甕で、当地域の当該時期に普遍的に見られる器形である。



第10図 2号住居跡出土遺物実測図(3)

3号住居跡 (第11・12図)

2号住居跡北約17m地点に、北側に4号住居跡を切り込んで占地し、全体の $\frac{1}{2}$ 強の検出で、西側半分は調査区域外に在り未掘である。主軸方位は、 $N-17^{\circ}-E$ を指向する。平面形は、掘り込み上面幅で、7.2m～7.3mの方形を呈する。ソフトローム面からの掘り込みは、北隅35cm・東隅50cm・南隅42cmを測り、壁はほぼ垂直である。床面はやや凹凸が目立つが、ほぼ平坦である。床面上には、木炭化した柱が見られる他木炭粒や焼土が多く検出され、火災住居跡であることをうかがわせる。床は全体にロームブロックで張られ、カマド前面と中央が強く踏みしめられ、壁寄りは軟弱である。主柱穴は3ヶ所より検出し、四本柱の柱構造であることが分かる。深さは、 $P1-74cm$ ・ $P2-71cm$ ・ $P3-78cm$ をそれぞれ測り、柱穴間は $P3-P1$ で4.3m・ $P1-P2$ で4.25mである。カマド東側の貯蔵穴状のピットは、長軸を南北に置き長軸68cm・短軸62cm・深さ57cmほどを測り、平面形は胴張りする隅丸方形である。覆土は、その状況から掘り直されたことをうかがわせ、カマド右袖部より散在して出土する須恵器壺がその上面にも見られたことから、住居跡廃絶以前にすでに埋もれていたものと見知される。カマドは北壁中央に置き検出し、煙導部は壁より26cmほど突出するだけである。左右袖部は、壁より1mほどの長さがあり、焚口に近い両袖先端にはレンガ状に加工した軟質砂岩が置かれている。燃焼部およ



第11図 3・4号住居跡実測図

A-A'

- 1層 表土層
- 2層 黒褐色土
- 3層 黒色土。若干のローム粒を含む。
- 4層 黒褐色土。多量のローム粒と若干の茶褐色土をブロック状に含む。
- 5層 暗褐色土。多量のローム粒を含む。
- 6層 暗褐色土。多量のローム粒・ロームブロック・木炭粒と若干の焼土粒を含む。
- 7層 暗茶褐色土。多量のローム土を含む。
- 8層 暗茶褐色土。ローム粒とロームブロック土。
- 9層 黒色土。暗褐色土をブロック状に含む。
- 10層 暗褐色土。やや硬い。

B-B'

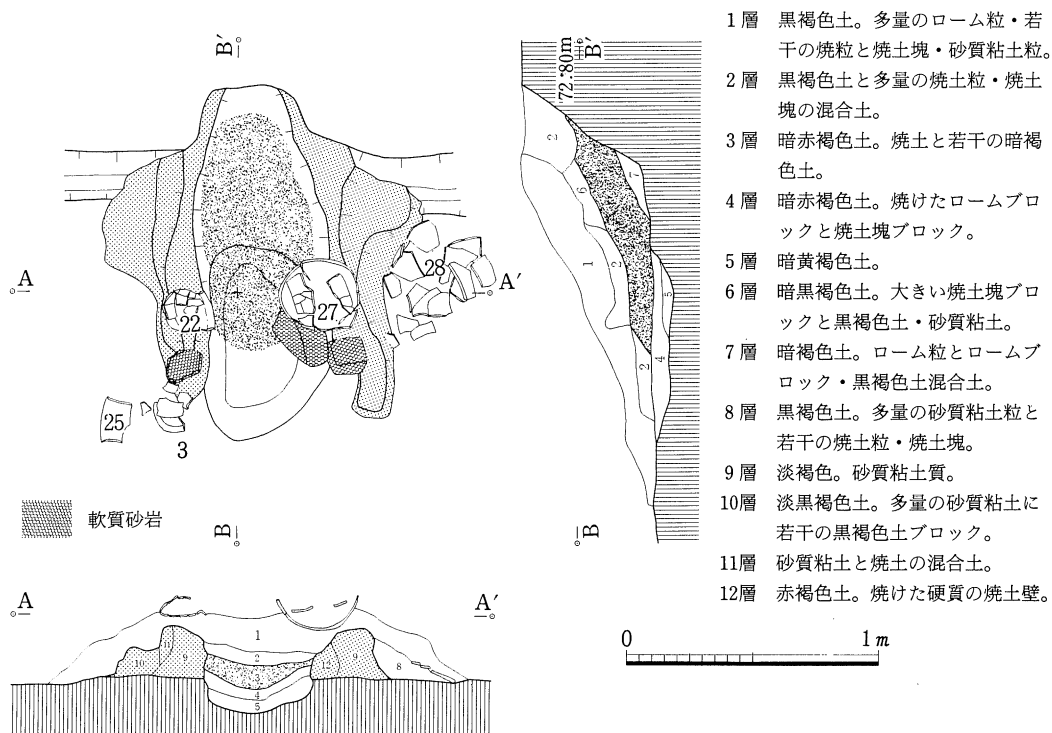
- 1層 表土層。(耕作土)
- 2層 ロームブロック・ローム土・黒褐色土混り。
- 3層 黒褐色土。多量のローム粒を含む。
- 4層 黒色土。多量のローム粒を含む。
- 5層 黒褐色土。少量のローム粒を含む。
- 6層 黒褐色土。多量のローム粒・ロームブロックを

C-C'

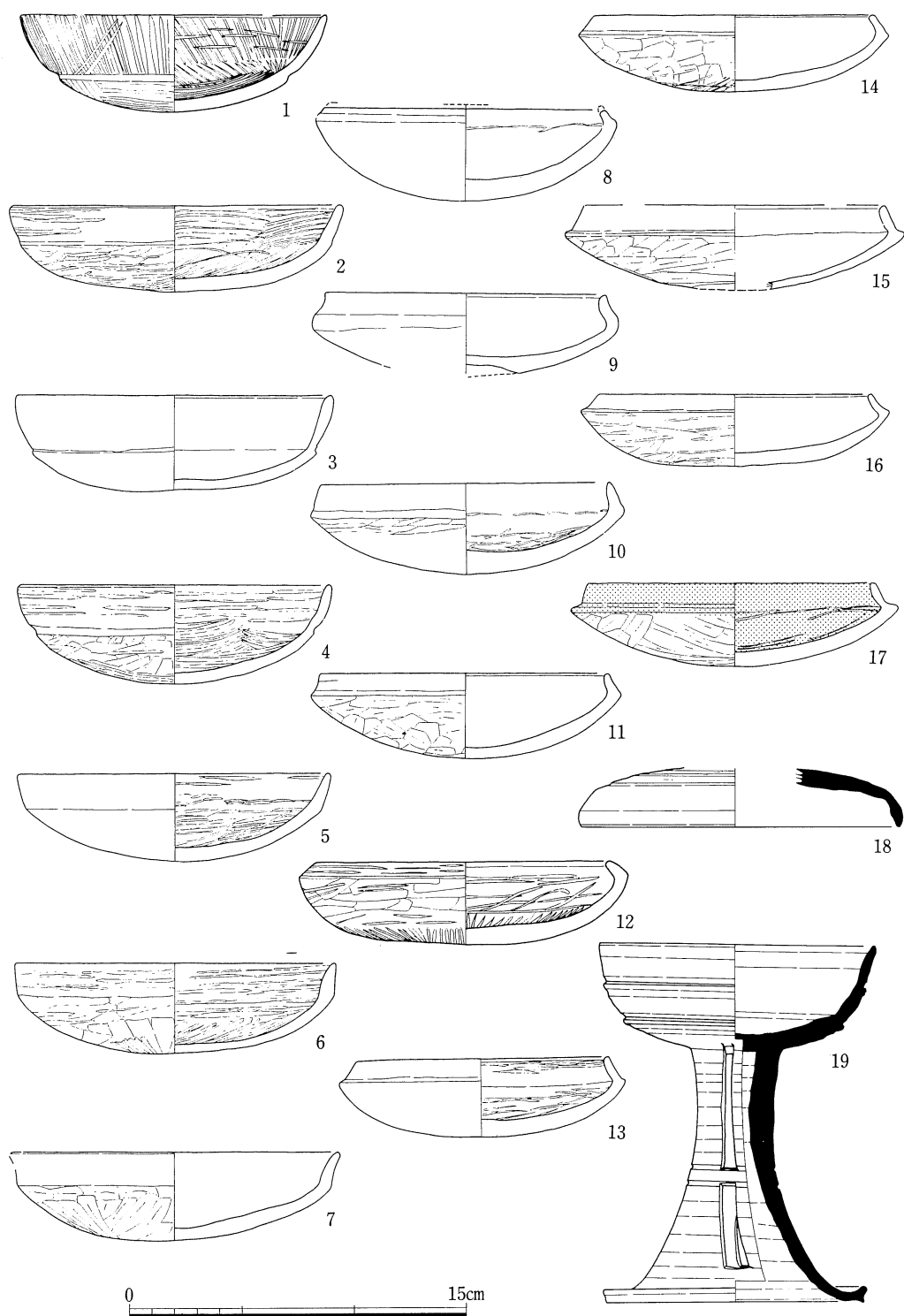
- 1層 黒褐色土。若干の焼土粒とローム粒を含む。
- 2層 褐色土。多量のローム粒と焼土粒を含む。
- 3層 黒褐色土。ロームブロックと黒色土を含む。
- 4層 黒褐色土。多量のローム粒・焼土粒・木炭粒を含む。(やや軟質)
- 5層 黒褐色土。多量のローム粒とより多量の焼土粒を含む。
- 6層 黒褐色土。多量のローム粒を含む。
- 7層 暗褐色土。多量のローム粒と若干のロームブロック。
- 8層 暗茶褐色土。ローム粒・ロームブロック土層

含む。

- 7層 黒褐色土。若干のローム粒とロームブロックを含む。
- 8層 暗褐色土。多量のローム粒・ロームブロックと若干の焼土粒を含む。
- 9層 暗褐色土。やや硬い。



第12図 3号住居跡カマド実測図



第13図 3号住居跡出土遺物実測図(1)

び煙導部には、焼土が充満する。焚口に近い燃焼部両袖部上には、22・27の土師器甕・壺が原位置を保つように置かれている。壁溝は調査区域内では全周することから、本来は四周するものと推定できよう。覆土は、3層よりレンズ状に堆積し自然埋没状況を指し、床面直上土層中には焼土粒や木炭粒を多量に含むことから、床面状況と同様に火災住居跡と思われる。

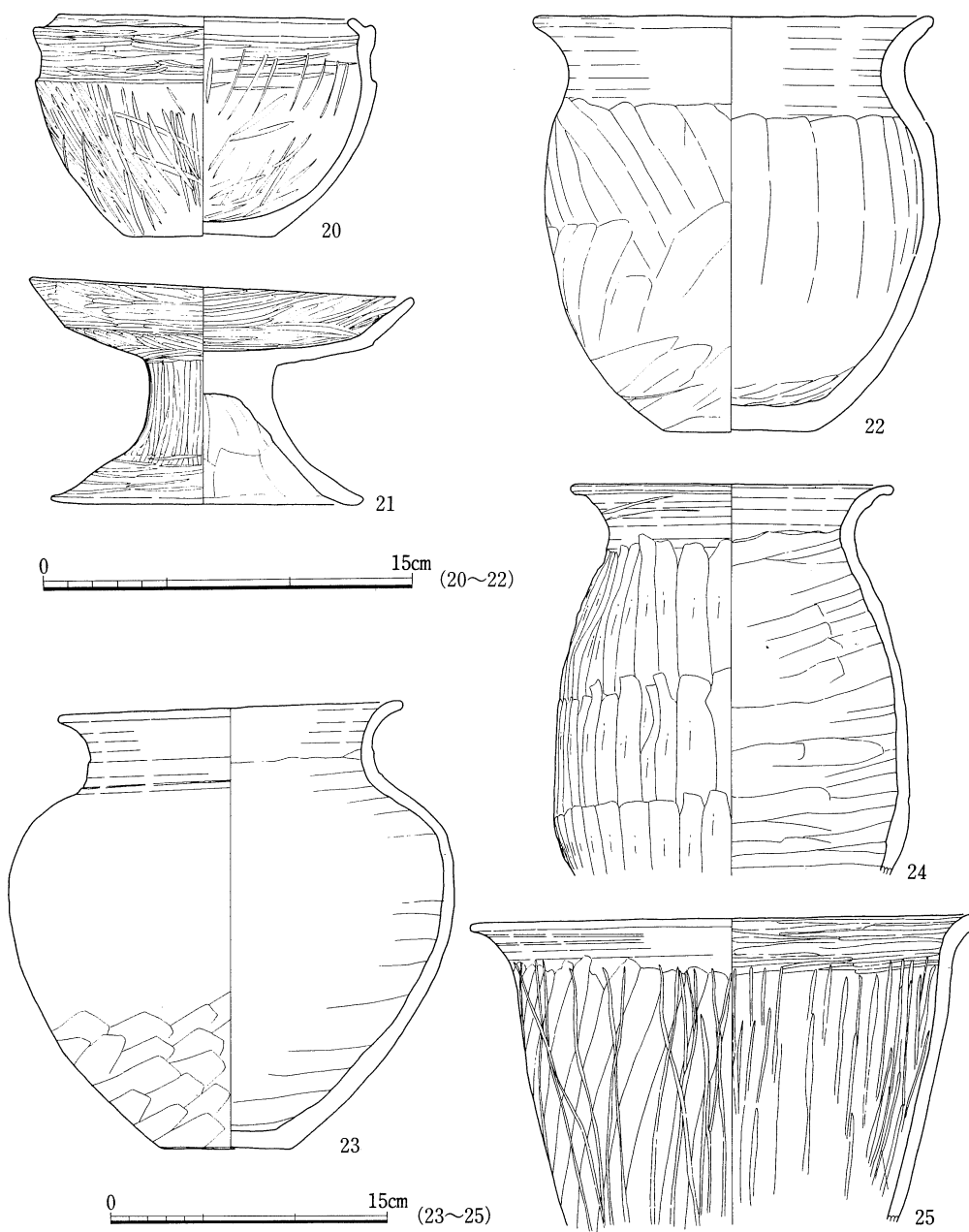
出土遺物 (第13・14・15・16図)

遺物には、土師器杯・高杯・椀・甕・甑・壺や須恵器蓋杯・無蓋高杯・広口壺などの土器の他に、紡錘車や鎌・刀子などの石製品や鉄製品など豊富な量を出土する。

1～7・10～14・17・19～33は、床面直上よりの出土もしくは出土状況から当住居跡の帰属と考えられる遺物で、図示した他の遺物も同時期の所産と考え大差はないように思う。土師器杯の11・12・13と5・7・10はそれぞれ重なり合って2地点より出土する。1～7の土師器杯は、丸底の底体部から立ち上がる外傾する口縁を特徴とし、8～17は、体部に受部状の稜、もしくは弱い稜を作り出し、内傾ぎみに立ち上がる口縁を特徴としている。1は、外面底体部の比較的内側に沈線による段を作り出し、底部が急激にすぼまる特徴を有し、全面丁寧に光沢のある篋ミガキを施し、当地域において希薄な存在と言える。3・5・9・10・12・13・14の杯は、それぞれ器形が微妙に異なるが、焼成後の線刻により『×』印を施している。3・9・12～14は内面に、5・10は外面底部にあり、12は2ヶ所に所有しており、須恵器に見られる×印とは一概に比較できないが興味深い。17は、本住居跡中において最も大ぶりの須恵器模倣杯であるが、内面と口縁部外面に丹彩を施し、受部の作り出しも明瞭であり、同形の15以外の杯に比してやや古式の様相を感じる。

18・19・28は、須恵器である。18は蓋杯で、天井部を欠き覆土中よりの出土である。天井部の篋ケズリは比較的丁寧に、肩までおよぶ。19は長脚二段二方透の無蓋高杯で、MT85号窯式期に比定できよう。28は広口壺で、カマド右袖部外側にはりつくように出土し、全体の1/3ほどの遺存率である。頸部上方に二条の沈線を巡らせ間にヘラ描きによる斜行文様帯を施し、胴部外面は平行タタキ後カキ目調整を行い、胴内面は同心円文である。

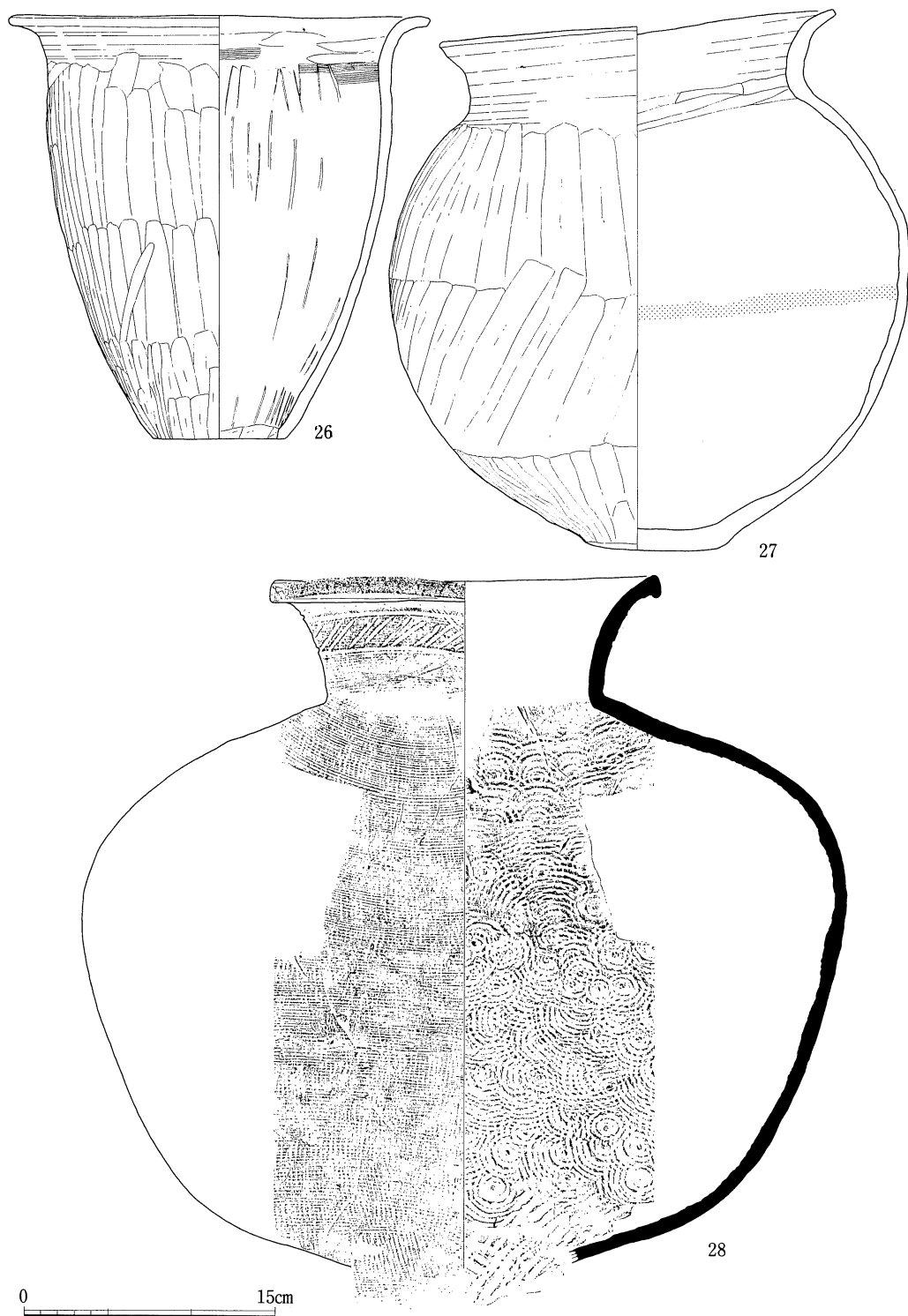
20は土師器椀で、口縁に受部と内傾して立ち上がる口縁を有し、有蓋状のやや特異な器である。全面にやや荒い光沢のあるミガキを施し、口径12cm・器高9cm・最大径13.9cmを計る。21は土師器高杯で、カマド焚口やカマド燃焼部覆土中より散在し出土する。器表面は20同様に仕上げられ、1・20・21は胎土・焼成および整形技法で酷似し、同一の土師器製作者によるものと考えられ、他には同様な土器はなく、杯・椀・高杯と言う器種各1点を検出したことは興味深い。23は土師器広口壺で、北隅付近に散在し出土する。口縁は強いヨコナデにより強く外反して立ち、肩の張る器形を呈し、胎土・色調において他の物と異質性を感じ、胎土は微粒で、色調は器表面乳赤色である。22・24～27は、甕・壺・甑でそれぞれ当地域において良く見られ



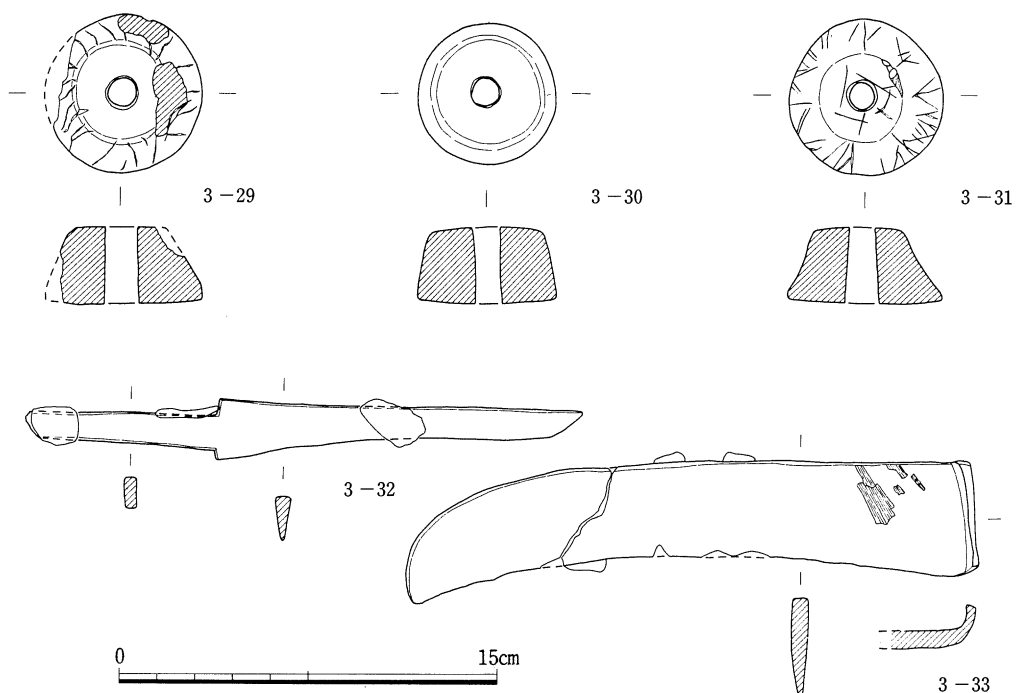
第14図 3号住居跡出土遺物実測図(2)

る普遍的な存在であろう。

29～31の紡錘車は、いずれも住居跡北西側の床面より出土する。29は部分的に欠損し、下方でやや外反ぎみで、体部に線刻で条線を縦方向に施している。30は体部にやや丸身を有し、ほ



第15図 3号住居跡出土遺物実測図(3)



第16図 3号住居跡出土遺物実測図

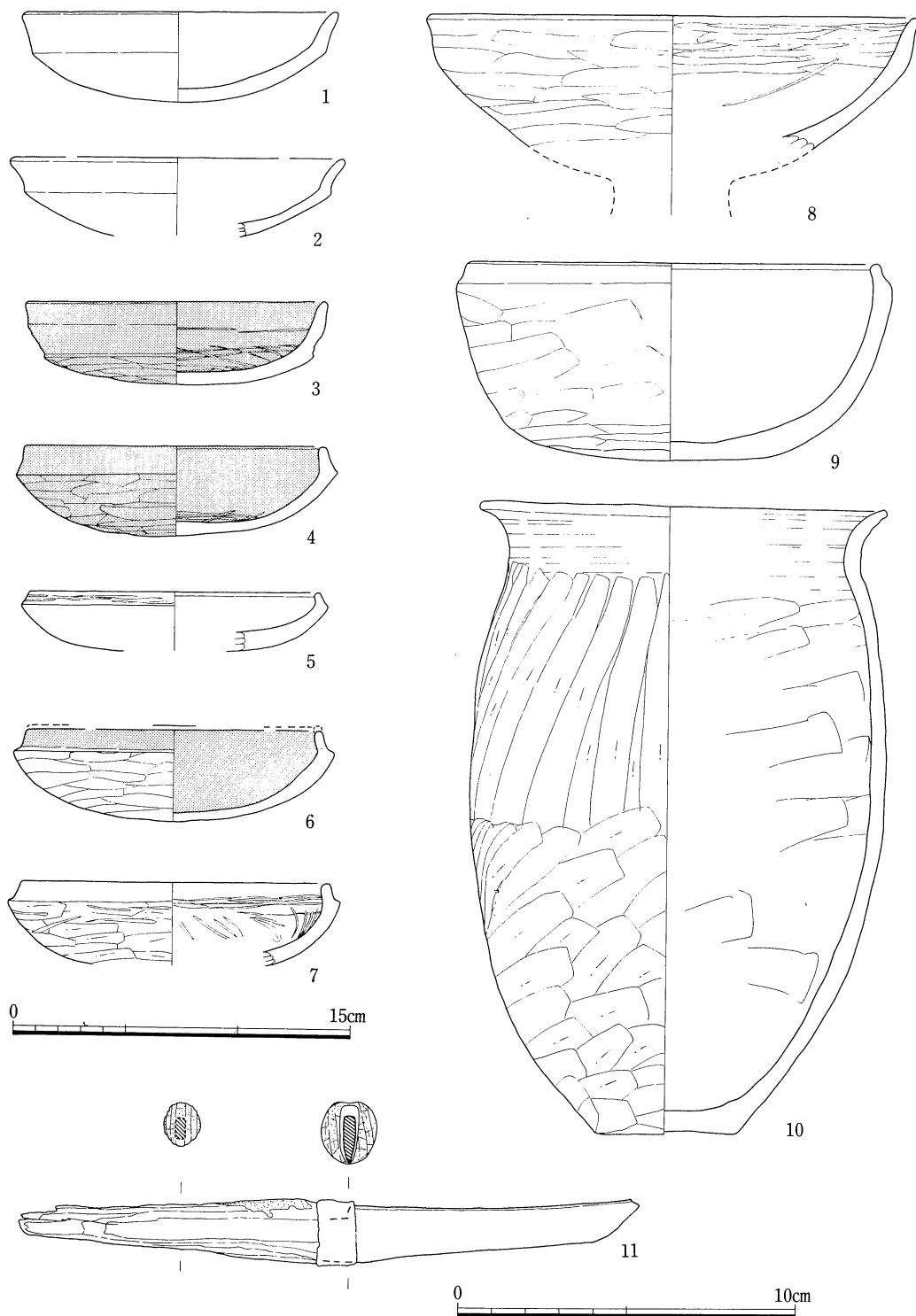
ほぼ柱状の断面を呈する。31は下方で強く外反する形状で、天井部と体部にそれぞれ線刻が見られ、体部のそれは『木』字形を呈している。石質はいずれも蛇紋岩で、色調は29が乳白色・30は黒青色・31は黒茶色である。

4号住居跡 (第17図)

3号住居跡に南西隅を大きく掘り込まれ、また東側半分は未調査区域にあり、全体の $\frac{1}{2}$ ほどを調査した。主軸方位は、 $N-22^{\circ}-W$ を指向する。平面形は、南北長6.7mほどを測り、東半分は未掘であるが、方形であろう。ローム面への掘り込みは、北西隅で30cm・南壁44cm・北東側で36cmを測る。床は、全体にやや軟弱で、ロームブロックを主体に全体に張り床される。ピットは、 $P1-65cm \cdot P2-35cm \cdot P3-50cm$ である。壁溝は、北壁西半分と西壁下に検出し他はない。床面標高は、72.5m前後に置く。土層は、自然埋没状況を指し、床面には少量ではあるが木炭粒が散らばっている。カマドは、その存在を残す程度で、殆ど破壊され残っていない。

出土遺物 (第18図)

出土遺物は良好な状況で、土師器杯・鉢・高杯・甕・刀子を検出した。1～4・6・8～11は、その出土状況より当住居跡の所産と考えられ、5・7の杯も当住居跡に帰属するものと考えてよからう。



第17図 4号住居跡出土遺物実測図

1～3の土師器杯は、丸底の底体部から立ち上がる外傾する口縁、4～7は受部状の稜より立ち上がり内傾する口縁部とそれぞれ特徴がある。1と6には、底部外面に焼成後に刻まれた線刻により『×』印を施す。3・4・6は黒色処理され、3は器表面全面、4・6は内面と口縁外面に施される。5～7は、稜より立ち上がる口縁が短いタイプのもので、6は本来の口縁を擦り削って短くしている。8は、覆土中よりの出土で、やや大ぶりの高杯であろう。9は、全体の½ほどの遺存で、口縁ににぶい段を有し雑なつくりである。11は刀子で、非常に残りが良い。茎は全面に、にぎりの木質を残し形態は不明であるが、刀部は刃先方向にやや細くなり、刃先は鋭い。関は、棟関である。

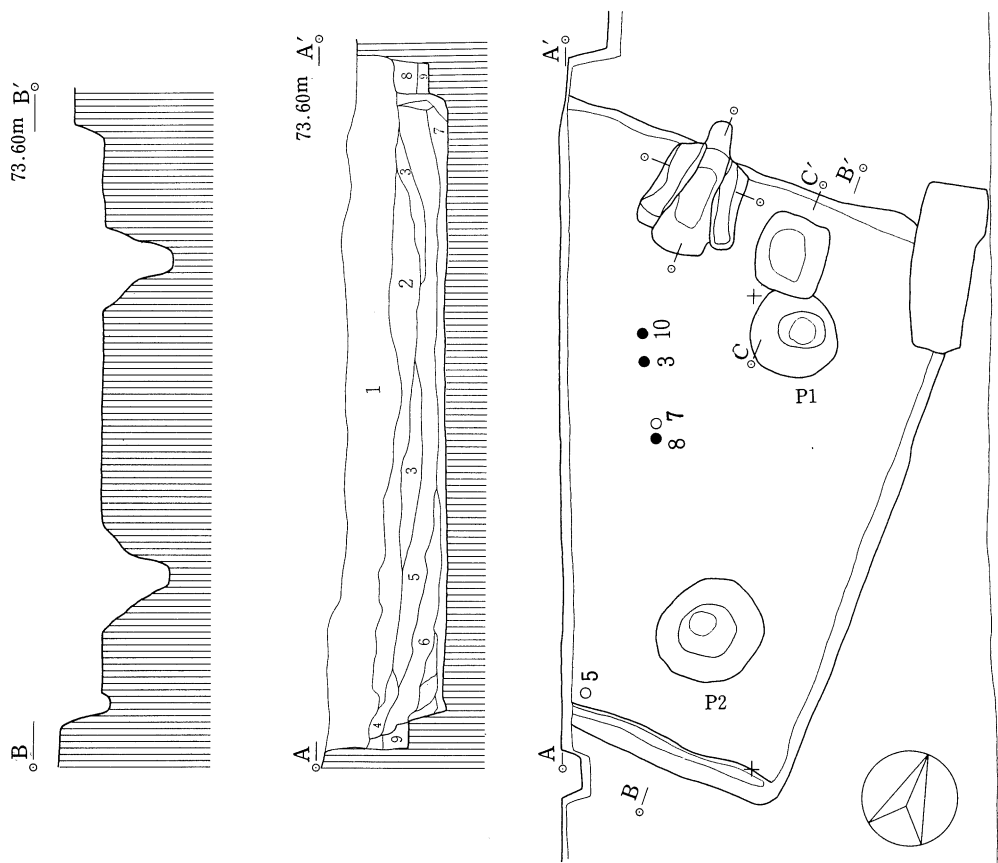
5号住居跡（第18・19図）

4号住居跡の北側に6mほどの間を置き占地し、西側半分は調査区域外に在り、全体の½ほどの調査である。主軸方位は、N-2°-Wを指向する。平面形は、主軸長約6.2mを測る方形であろう。ローム面からの掘り込みは、北東隅26cm・北西端20cm・南東隅44cmを測り、当住居跡が南から北に向って緩やかな傾斜地にあることから、北側が浅く、南側が深くなる。壁は、やや傾斜し掘り込まれ、壁溝は南壁下だけ検出する。床面は中央およびカマド前面が硬いが、壁寄りはやや軟弱となる。床は、壁寄りにロームブロックを主体に張り床される。主柱穴は、2ヶ所検出し、P1は72cm・P2は70cmの深さである。カマド右側に貯蔵穴状のピットを設け、胴張りする隅丸方形を呈し、深さ52cmで、壁は傾斜して掘り込まれる。覆土は、2層下面よりすでにレンズ状に堆積し、本来の掘り込み深さは70cmに達するものであろう。カマドは北壁の中央に設け、袖部長0.9～1m・煙導部は壁より30cmほど突出する。構築土には、粘性の強い物と弱い砂質の2種類の粘土を用い比較的しっかりと造られている。床面標高は、72.28mに置く。

出土遺物（第20・21図）

本跡よりの出土遺物は、ほとんどが覆土中よりの出土で、本跡の所有となる物は5の土師器杯1点のみである。

1～3は、体部に稜を有し、外反ぎみに立ち上がる口縁を特徴としている。3は全面に荒いミガキを施し、底部外面には焼成後に線刻による『×』印を施している。3は、浅い底体部で体部に低い段状の稜を有し、やや外傾ぎみに立ち上がる口縁を特徴としている。図示はしなかったが、全面黒色処理されている可能性もある。4～6は、体部に受部状の稜のあるもので、内傾ぎみに立ち上がる口縁を有している。7は、器肉も薄くやや丁寧に作られ、口縁を擦り削って擬似口縁としている。また内面には、強いミガキにより『×』印を所有する。10は、内面黒色処理を施す、高杯であろう。13は、長脚の土師器高杯脚部で外面は丁寧に丹彩される。14



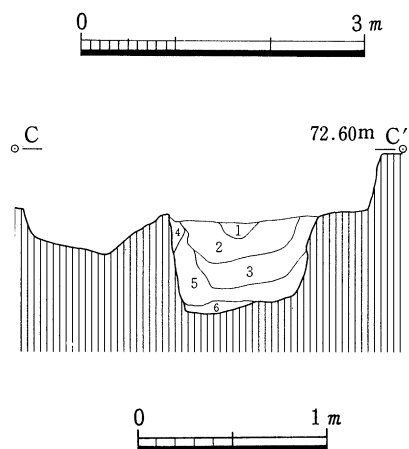
住居跡土層

A-A'

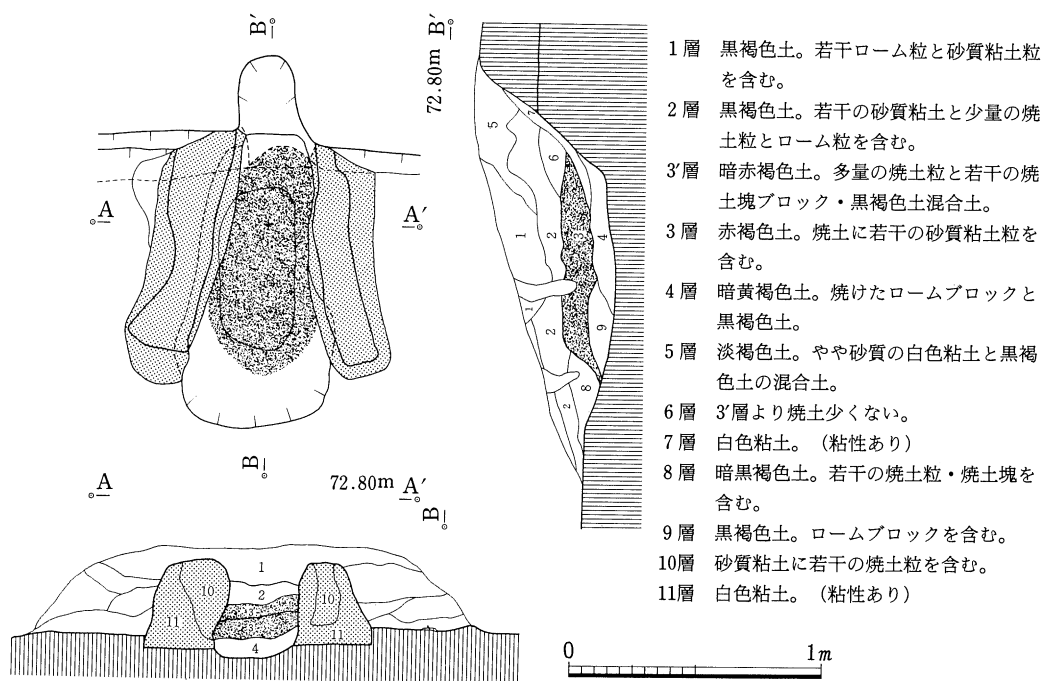
- 1層 表土層
- 2層 黒褐色土。若干の暗褐色土をブロック状で含む。
- 3層 黒色土。若干のローム粒・ロームブロック含む。
- 4層 暗褐色土。多量のローム粒含む。
- 5層 黒色土。多量のローム粒含む。
- 6層 暗黒褐色土。ローム粒と暗茶褐色を含む。
- 7層 暗黒褐色土。ローム粒と多量のロームブロック含む。
- 8層 暗黒褐色土。
- 9層 暗褐色土。(やや硬い)

貯蔵穴土層

- 1層 黒色土。多量のローム粒含む。
- 2層 黒褐色土。多量のローム粒と褐色土粒含む。
- 3層 暗黒褐色土。多量のローム粒と若干のロームブロックを含む。
- 4層 暗黄褐色土。ローム粒・ロームブロック土。
- 5層 暗黒褐色土。多量のローム粒と若干の炭化物粒を含む。
- 6層 褐色土。ローム粒と少ロームブロックを含む。



第18図 5号住居跡実測図

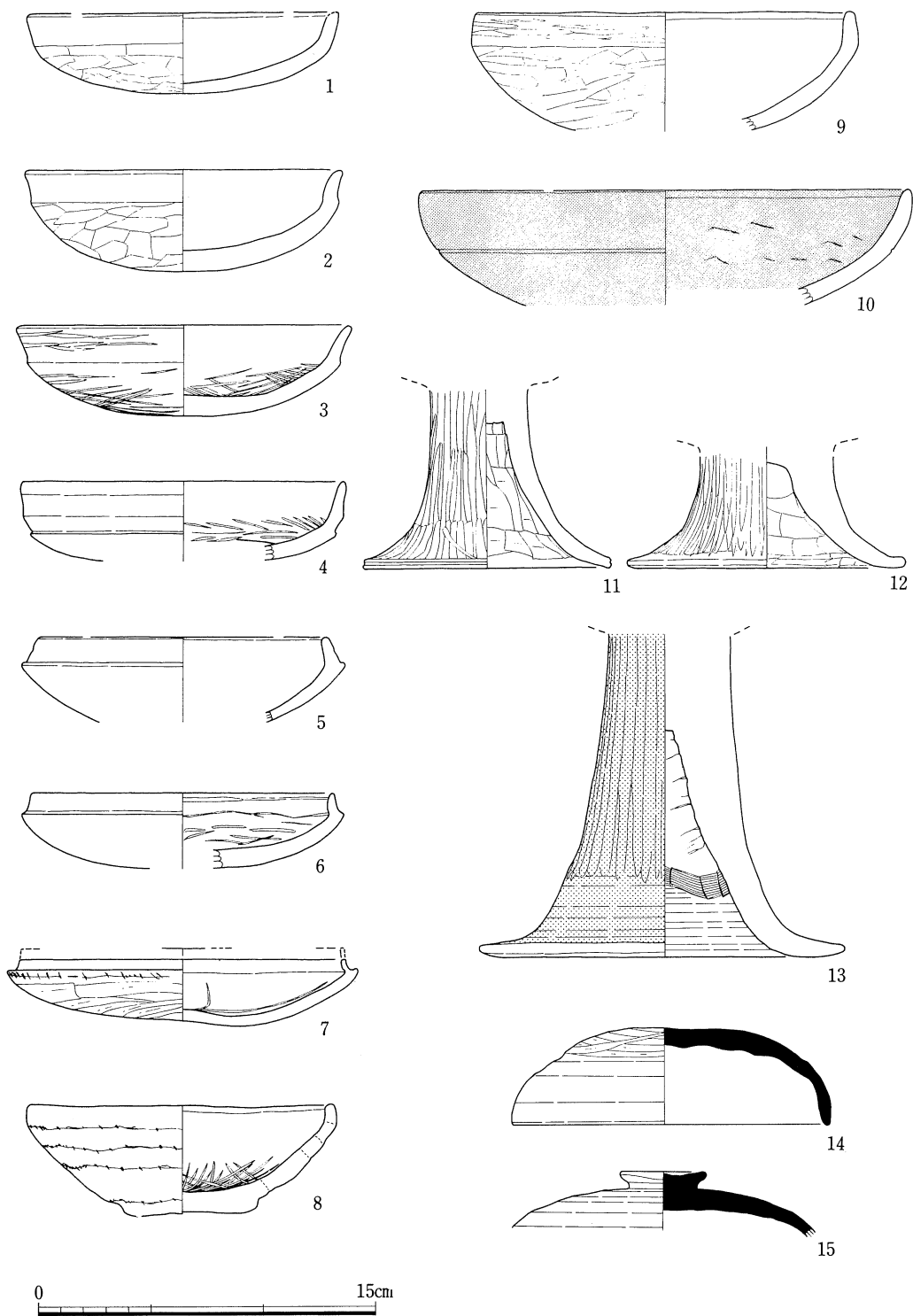


第19図 5号住居跡カマド実測図

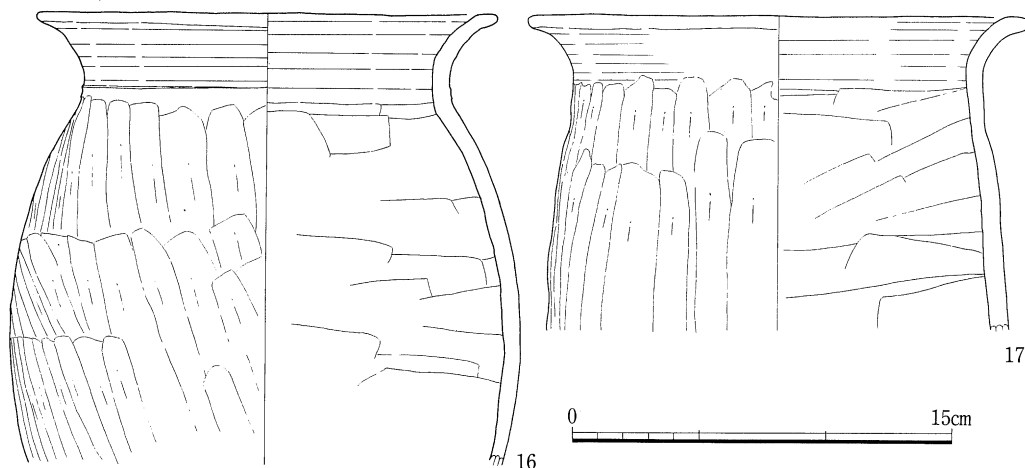
・15は須恵器で、14は蓋杯の蓋で、口縁は一部のみの接合である。推定で口径14.5cm・高さ4.3cmを計る。天井部は丸く、口縁はやや開きぎみに下降し、天井部外面の篋ケズリは雑である。6世紀末より7世紀初頭の年代が考えられようか。15は須恵器蓋で、天井部一部の破片である。天井部の篋削りは、現存する範囲で全体におよび、比較的丁寧に仕上げ、偏平なつまみを有する。16～17は、土師器甕で、胴部の形態がやや異なるものである。

6号住居跡 (第22図)

5号住居跡の北 3.5mとやや近接し占地し、西側半分の検出で、東側半分は調査区域外にあり未掘である。主軸方位は、N-4°-Wを指向する。平面形は、主軸長7.65mを測る方形と推定できよう。ローム面からの掘り込みは、北西隅10cm・南西隅33cmで、当住居跡の占地在南から北に向って緩やかに傾斜し占地するため南が深くなる。壁は、やや傾斜して掘り込まれ、壁溝は、調査区域内では全周することから、四周するものと推定できよう。床面は、中ほどは堅く踏まれるが、壁寄りはやや軟弱である。床は、南から北へやや傾斜し、壁寄りはロームブロック土で張り床される。主柱穴は2ヶ所検出し、段を有して掘られ、P1-66cm・P2-88cmの深さを測り、P1-P2の間は4.5mである。覆土は、やや不規則な堆積状況で、人為的に埋戻された可能性がある。また、覆土より本来の掘り方深さは、55cm以上あったものと推定できる。床面標高は、72.1mほどに置く。



第20图 5号住居跡出土遺物実測図(1)



第21図 5号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物 (第23・24図)

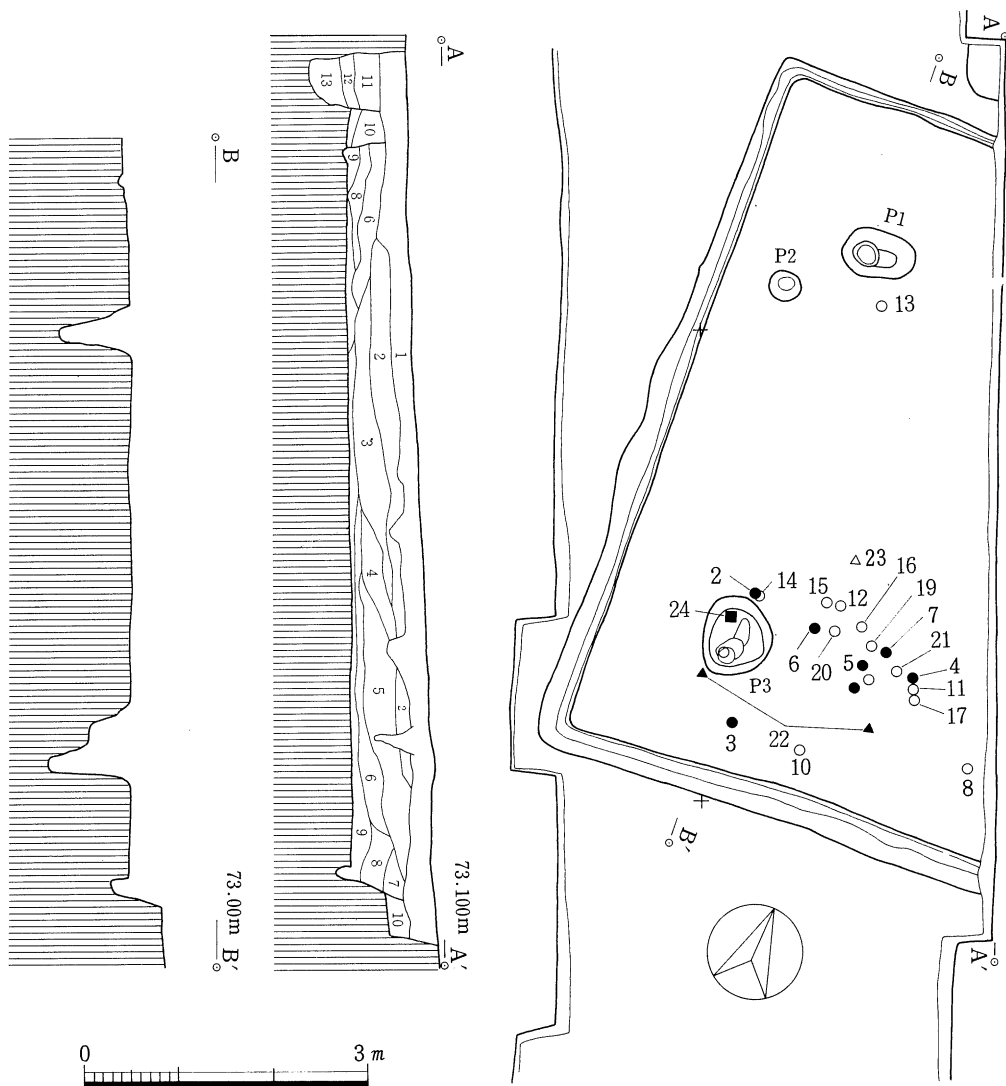
本跡からは良好な状態で、多量の土師器杯の他に鉢・甕・高杯などを出土する。遺物のほとんどは、南西部に集中的に検出し、全て当住居跡に帰属するものと考えてよからう。

1～7は、体部に稜を作り丸底の底体部とそれから立ち上がる外傾する口縁を特徴とする。1・2は、3～7とはやや器形を異にし、稜が不明瞭で、口縁は外傾し直線的に開く。3～7も、3・4の様に突出ぎみの稜と、5～7のように突出しない2種がある。8～21は、丸底の底部と、体部に受部状の稜、そして内傾して立ち上がる口縁を特徴としている。またこれらも何種かに分けられる。13は、口径13.5cm・受部径 15.55cm・器高 3.7cmを測り、最も大ぶりなもので、明瞭に受部を作り出す。8～12・14～19の受部の作りがやや弱いものに分けられ、また15～18のような受部が丸く作り出され立ち上がる口縁が短いものに分かれる。20～21のように、受部が丸いくの字状に表現され、簡略化されるものが同時に存在する。

4杯内面には、強いミガキにより『米』を、また底部外面には焼成後線刻により『×』をそれぞれ施す。10の杯底部外面中央には、焼成後線刻により『α』印を施し、これは一筆書きで×印を刻んだものであろう。また13・16の杯にも焼成後線刻により『×』を、13は底部外面・16は内面に、それぞれ施されている。22の土師器高杯は、杯部内外面と脚外面に丹彩を施す。23の鉢も、外面丹彩の可能性がある。

7号住居跡 (第25・26図)

西区調査区の最も北側に、6号住居跡の北35cmほどのに検出し、カマド煙導部先端が未調査区にあるだけである。主軸方位は、N-71°-Wを指向する。平面形は、長軸長5.45m・短軸長



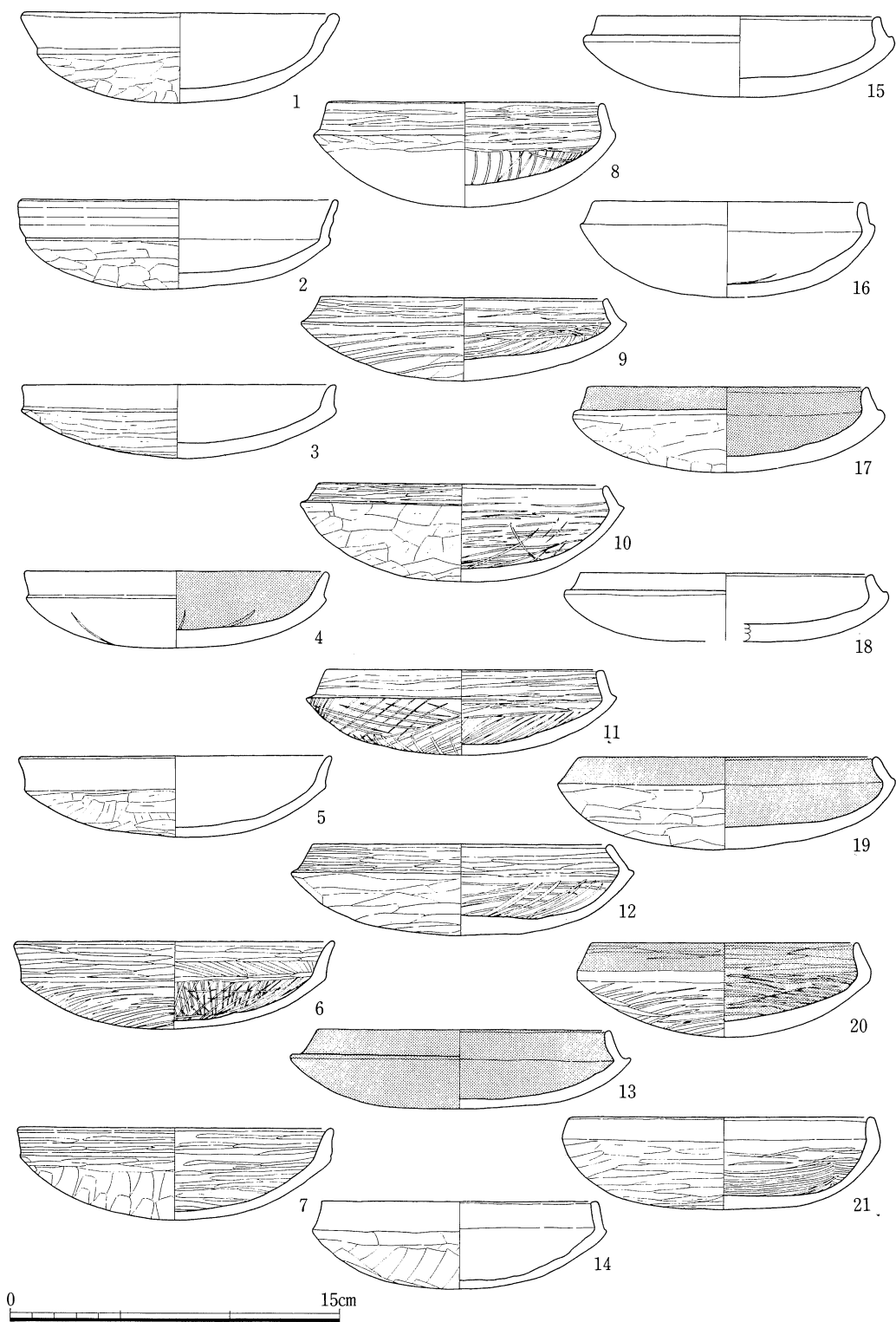
6号住居跡土層

- 1層 表土層。(耕作土)
- 2層 黒褐色土。(表土直下)
- 3層 暗黒褐色土。若干のローム粒を含む。
- 4層 黒色土。若干のローム粒を含む。
- 5層 黒色土。若干のローム粒と暗褐色土ブロックを含む。
- 6層 暗褐色土。多量のローム粒と若干のロームブロック・暗茶褐色土ブロックを含む。

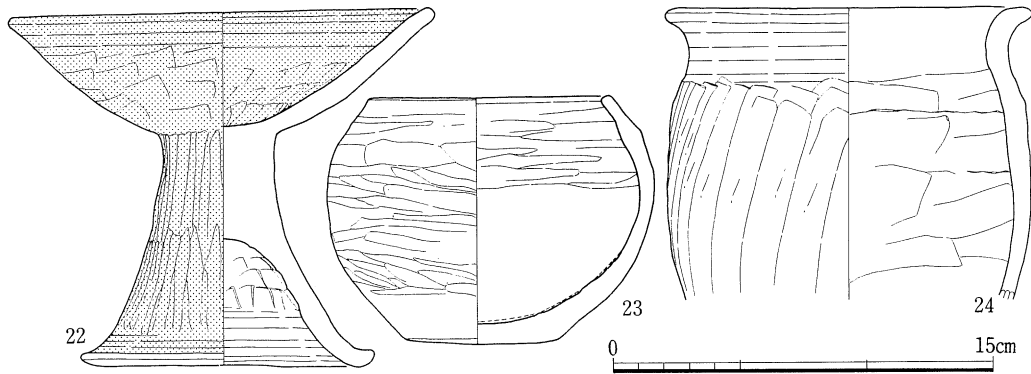
7層 暗褐色土。

- 8層 暗茶褐色土。若干のローム粒とロームブロックを含む。
- 9層 暗褐色土。多量のローム粒とロームブロックを含む。
- 10層 暗黒褐色土。暗褐色をブロック状に含む。
- 11層 黒褐色土。2層をブロック状に含む。
- 12層 暗黒褐色土。褐色土ブロックを含む。
- 13層 黒色土。若干のローム粒を含む。

第22図 6号住居跡実測図



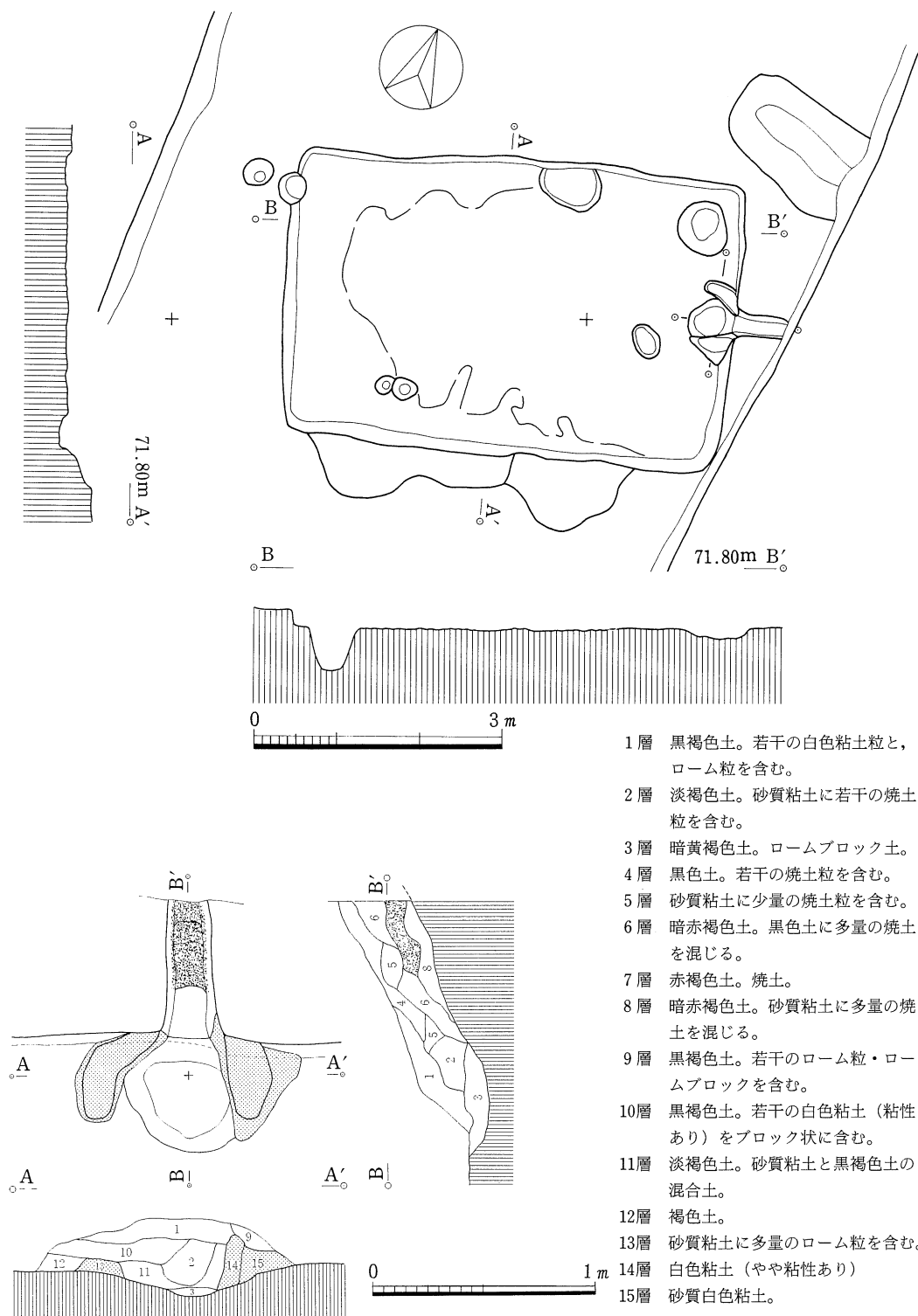
第23図 6号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 6号住居跡出土遺物実測図(2)

3.4～3.6 mを測り、ほぼ長方形を呈する。掘り込みは、全体に浅く南壁寄りで深く北で浅く、5～25cmを測る。床は凹凸が目立つが中央は堅く、壁よりは軟弱である。カマドは東壁中央に設け、煙導が長い。袖部は壁より45cm前後のびるだけで短い。燃烧部も、壁に接して設け、焼土は煙導部内に充満するだけである。

出土遺物は無く、時期限定の根拠に欠けるが、カマド煙導部や住居跡の型態などから考え、8世紀後半～9世紀代の年代が考えられよう。



第25図 7号住居跡・カマド実測図

遺物観察表

凡 例 遺構欄は上段より，出土遺構の所在・挿図番号と住居跡番号を表す。

種別欄は上段より，土師器・須恵器の別，器種，遺存率を記す。

法量欄には各部の計測値を記し，口は口縁部径，稜は杯などの稜径，頸は頸部径，胴は胴部径，底は底部径，高は器高，基は基部径，大は最大径である。

備考欄には出土レベルを記し，床面出土は床面直上，覆土は覆土中で+10は床面より10cmういて出土する意味である。

遺 構 挿 図	種 別 器 種 遺存率	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 焼 成 色 調	備 考
1 住 5-1	土 師 器 壺 完 形	口- 9.0 胴- 12.1 底- 5.0 高- 12.2	口縁は垂直に立ち，胴部は球状。底部は平底である。	内外面荒い刷目を施し，内面は筥ナデ，外面は雑な磨き状の筥ナデ。	小砂粒含む。 普 通 淡 赤 褐 色	口縁内面と外面上半分に丹彩を施す。床面出土
1 住 5-2	土 師 器 器 台 脚 欠 く	口- 7.95 基- 3.5 高- 3.9+	口縁端部は細くつまみ上げ，やや上方にのび。脚は開く。	全体に丁寧な磨き状の筥ナデ。	微砂粒含む。 不 良 黒 茶 褐 色	中央の孔は二孔で一方はふさぐ。床面出土。
2 住 8-1	土 師 器 杯 口縁 1/4	口-(16) 高- 3.6+	肉厚の口縁は外傾し開く。体部に段状の稜を有する。	口縁は荒いヨコナデ。体部外面筥ナデ，内面磨き。	緻 密 不 良 明褐色	内面黒色処理 覆土+10
2 住 8-2	土 師 器 杯 口縁 1/4	口-15.5 高- 3.6+	口縁は外傾ぎみに立ち体部に沈線を施し，口縁と底部の境とする。	口縁内外面ヨコナデ。底部外面筥ケズリ。	緻 密 良 暗褐色	内面黒色処理 覆土+30
2 住 8-3	土 師 器 杯 口縁 1/2	口-15.5 高- 4.7+	口縁は短かく，やや外傾する。体部上側に稜を有する。	口縁内・外面は丁寧な筥磨き。底体部外面は雑な筥磨き。	密で赤色粒含む。良好 淡褐色	体部に輪積み痕を残す。 覆土+30
2 住 8-4	土 師 器 杯 2/3	口-14.6 高- 4.2	口縁は短かく立ち，やや開く。底部はやや突出ぎみの丸底を呈す。	内面不規則な筥磨きながら丁寧。底体部外面は光沢のある筥磨き。	密で赤色粒含む。良好 暗 赤 褐 色	内面黒色処理。 底部外面線刻『×』印あり。 略床+7
2 住 8-5	土 師 器 杯 一部欠く	口-15.3 高- 3.4	やや長目の口縁は，外反し開く。底体部は浅く，底は平底ぎみ。	口縁内外面丁寧な横ナデ。内面底は筥ナデ。底外面削り状の筥ナデ。	密で赤色粒含む。良好 暗 黒 褐 色	床面出土。
2 住 8-6	土 師 器 杯 1/2	口-15.2 高- 4.2	やや突出ぎみの稜から立つ外反する口縁。丸底の底部。	口縁外面と内面は丁寧な筥磨き。底体部外面筥磨き。全体光沢あり。	密で赤色粒含む。良好 白褐色	覆土+15~20
2 住 8-7	土 師 器 杯 一部欠く	口-14 高- 4.05	僅かに突出ぎみの稜から立つ外傾する口縁。底部は丸底。	内外面とも筥磨きで，やや光沢ある。	密で若干の赤色粒含む 良 好 明褐色	床面出土。

2 住 8-8	土 師 器 杯 全体 1/2	口-13.1 稜-14.55 高-3.5+	口縁は外反ぎみに内傾し立つ。受部状の稜はやや丸身を有す。	口縁内外面強い横ナデ。内面篋ナデ。底体部外面篋削り後荒い磨き。	やや砂質で密。不良。淡褐色。	口縁は擦り削り、擬似口縁とする。覆土+30
2 住 8-9	土 師 器 杯 底欠く 1/4	口- (13) 稜- (14) 高-3.4+	肉厚の口縁はやや内傾ぎみに立つ。受部状の稜は丸身を持つ。	口縁外面横ナデ。底体部外面篋削り。内面は部分的に篋磨き。	密。微粒雲母含む。普通。淡褐色。	受部直上に強い篋磨きによる沈線有する。カマド内
2 住 8-10	土 師 器 杯 一部欠く	口-14 高- 5.6	肉厚の口縁は垂直に立つ。底部は張り付けし丸底ぎみとなる。	口縁内外面強い横ナデ。体部は雑な篋削りで、輪積み痕を残す。	砂粒多い。普通。暗赤褐色。	覆土+17
2 住 8-11	土 師 器 杯 口唇欠く	口-13.5 稜-13.6 高- 4.2	口縁は垂直ぎみに立つ。受部はやや突出。	内面と口縁外面は光沢のある篋磨き。底部篋削り。	赤色粒含む。普通。黒褐色。	口唇は磨滅し、擬似口縁化する。覆土。
2 住 8-12	土 師 器 杯 1/4	口-(13.5) 稜-(14.5) 高- 3 +	口縁は内傾し立ち、稜はやや突出する。肉厚の底体部は浅い。	内外面共に丁寧な篋磨きで、内面は光沢がある。	密。良好。明褐色。	覆土+15
2 住 8-13	土 師 器 杯 1/2	口-12.9 稜-13.95 高-3.5+	口縁は内傾ぎみに立ち、受部状の稜はややするどさを欠く。	2 住-12と同じ	密。赤色粒を含む。良好。明褐色。	底部全面に深い擦痕有する。覆土。
2 住 8-14	須 恵 器 蓋杯 (蓋) 天井欠く 1/4	口-(17) 高-4.1+	肩部直下に沈線有す。口縁は開き気味に下降し。口縁端内面に稜あり。	天井部篋削りは丁寧で外面口縁端には刷目を施す。	密。白色砂粒を含む。良好。明褐色。	遺構外。
2 住 8-15	須 恵 器 蓋杯 (蓋) 1/4	口-(12.2) 稜-(15) 高- 4.2	口縁は外反ぎみに内傾して立つ。受部は上方にのび端部はやや丸い。	天井部の篋削りは雑で体部から口縁の成形もやや荒い感がある。	密。白色砂粒含む。普通。暗灰色。	断面色はサンドイッチ状で真中は茶。覆土+14
2 住 8-16	土 師 器 高 杯 1/4	口-(19) 高-4.1+	口縁は大きく外傾し。体部外面に段状の稜を有す。	内面は篋磨き。外面口縁は横ナデ、体部は篋削り。	砂 質。良好。暗茶褐色。	覆土+15
2 住 8-17	土 師 器 高 杯 杯部 1/3	口-(15) 高- 4+	口縁は緩く外反し、体部はやや丸身を持つ。	2 住-16と同じ	密。良好。淡褐色。	床面出土。
2 住 9-18	土 師 器 高 杯 脚 の み	口-3.5 稜-9.8 高-5.5+	短い脚は大きく開く。端部は、僅かに外反する。	内面篋削り、外面削り状の篋ナデ。口縁内外面を横ナデ。	微砂粒質。普通。明褐色。	略床面出土+ 4
2 住 9-19	土 師 器 高 杯 脚 の み	口-3.5 稜-9.8 高-5.4+	柱状の脚は中位で急に外方に開く。端部はやや外反する。	外面は強い篋ナデ。内面篋削りで、口縁内面は横ナデ。	緻 密。良好。淡赤褐色。	外面と僅かに残る杯内面は丹彩。覆土。
2 住 9-20	土 師 器 小型壺 上半 1/2	口- 8 胴- 9.6 高-5.5+	広口で、口縁は短くやや外傾し立つ。胴部は球状を呈す。	口縁は強い横ナデ。胴部外面は荒いナデ状の磨き。	緻 密。良好。明褐色。	略床面+ 8

2 住 9-21	土 師 器 壺 上半 1/2	口-15.5 頸-14.5 胴-24.8	短い口縁は外反し開き、 端部はシャープな仕上げ。 胴部は球状呈す。	口縁は内外面横ナデ。 胴内面に明瞭な輪積痕 を残す。	緻 密 普 通 淡褐色	外器表面丹彩の 可能性あり。 覆土+6~20
2 住 9-22	土 師 器 鉢 底欠く 1/2	口- 12 稜- 13 高-5.7+	口縁は内傾し立ち、肩 に稜を作る。体部は半 円球状を呈す。	口縁内外面横ナデ。体 部外面篋削り、内面は 篋ナデ。	緻 密 普 通 暗褐色	覆土+15~40
2 住 9-23	土 師 器 鉢 口唇欠く	口-10.2 胴-12.8 底- 6.8 高- 7.6	口縁は内傾し、肉厚胴 部はやや丸い。平底で ある。	口縁は内外面横ナデ。 胴内面横ナデ、外面篋 削りで輪積痕を残す。	砂粒含む。 普 通 赤褐色	床面出土
2 住 9-24	土 師 器 鉢 底欠く 1/2	口-13.5 胴-18 高-9.2+	口唇はコ字状に仕上げ 胴部は球状、口縁稜は 明瞭に作られる。	口縁は内外面丁寧な横 ナデ。体部外面篋ナデ、 下端削り状の篋ナデ。	緻 密 良 好 淡 赤 褐 色	略床面出土+8
2 住 9-25	土 師 器 甌 1/2	口-21.5 高-20 +	口縁は僅かに外反し開 く。口唇は丸い。胴下 半のすばまりは急。	口縁内外面横ナデ。胴 内面篋削り。内面は荒 い篋磨きを施す。	砂粒を含む 普 通 淡 赤 褐 色	略床面出土+5
2 住 9-26	土 師 器 甕 一部欠く	口-16.1 胴-15.4 底- 6 高-14	口縁は大きく外反し、 胴部は丸く、最大径は やや下にある。	口縁内外面横ナデ。胴 内面篋ナデ。胴外面篋 削りと削り状の篋ナデ。	砂粒含む。 普 通 暗黒褐色	床面出土
2 住 9-27	土 師 器 甕 底欠く 1/2	口-16 胴-15.4 高-11.2+	口縁は短かく、外反し 開く。胴部はやや丸く 最大径は上位にある。	口縁内外面横ナデ。胴 内面は削り状の篋ナデ、 外面はナデ状の削り。	砂粒含む。 普 通 暗褐色	覆土中
2 住 10-28	土 師 器 甕 1/2	口-17.4 胴-17.1 底- 4.9 高-27.3	口縁は大きく外反し、 水平となる。長胴の胴 部で、平底である。	口縁内外面横ナデ。胴 部内面は篋ナデ、外内 削り状の篋ナデ。	砂粒含む。 普 通 明褐色	床面出土
2 住 10-29	土 師 器 甕 底 欠 く	口-17.5 胴-17.7 高-26 +	口縁は外反し、開く。 長胴の胴部には凹凸が 目立つ。	3 住-28に同じ	砂粒含む。 普 通 暗褐色	床面出土
3 住 13-1	土 師 器 杯 口縁は 1/4	口-13.8 高- 4.3	口縁は内湾ぎみに開い て立ち、体部に段を有 し、浅い丸底となる。	内外面全体に丁寧な磨 きを施し、光沢がある。	緻 密 良 好 明褐色	貯蔵穴中
3 住 13-2	土 師 器 杯 完 形	口-14.9 高- 3.9	口縁は外傾し開き、底 体部は丸底。体部に微 に稜を作る。	内外面全体に不規則な 荒い篋磨きを施す。	微砂粒含む 良 好 暗褐色	床面出土
3 住 13-3	土 師 器 杯 4/5	口-14.2 高- 4.2	口縁はやや内湾ぎみに 開く。体部に突出する 稜を有す。底体部は浅 い。	内面は不規則ながら丁 寧な篋磨き。外面は部 分的に篋磨き。	緻 密 良 好 暗褐色	内面底部に線刻 ×印あり。 床面出土
3 住 13-4	土 師 器 杯 1/2	口-14.4 高- 4.4	口縁は内湾ぎみに開く。 体部に沈線により稜を 作り、底は浅く、丸い。	内外面に不規則な篋磨 きを施す。	密。赤色粒 含む。普通 明褐色	床面出土

3 住 13-5	土 師 器 杯 完 形	口-14 高- 3.95	口縁はやや外傾し、開く。体部にく字状の稜を持つ。底部は丸底。	内外面共に弱い篋磨きを施す。	密。赤色粒を含む。良明褐色	底部外面に線刻で×印を施す。床面出土。
3 住 13-6	土 師 器 杯 接 完 形	口-14.4 高- 4.1	肉厚の口縁はほぼ垂直に立つ。体部に鈍い稜を有し、底部は丸底。	内面丁寧に弱い篋磨き。外面篋ナデ。	密。赤色粒を含む。良淡 赤 褐色	床面とカマド中
3 住 13-7	土 師 器 杯 完 形	口-14.8 高- 4.1	口縁は外反し開き。体部にく字状の稜を有する。底部は丸底。	口縁内外面横ナデ。底体内面は篋ナデ、外面削り状の篋ナデ。	微砂粒質。普通明褐色	床面出土
3 住 13-8	土 師 器 杯 完 形	口-12.6 稜-13.45 高-3.6+	口縁は短く内傾する。体部に受部状の鈍い稜を有す。底部は深く丸い。	口縁は横ナデ。内外面篋ナデ？	微砂粒質。不良明褐色	口唇は擦り削る内面に線刻×印あり。覆土+20
3 住 13-9	土 師 器 杯 3/5	口-12.6 稜-13.7 高-3.6+	口縁は外反ぎみに内傾し、受部状の稜は丸く鈍い。底部は丸底。	全面に荒いが強い篋磨きを施す。	密 普通 淡 暗 褐色	内面にすず付着内面に線刻の×印を施す。覆土+18
3 住 13-10	土 師 器 杯 接 完 形	口-13 稜-14 高- 4.1	口縁は内傾し、受部状の稜は僅かに突出す。底体部は、丸底となる。	全体に弱い篋磨きを施し、底体部外面はやや光沢がある。	密。赤色粒を含む。良明 赤 褐色	底部外面に線刻×印あり。床面出土
3 住 13-11	土 師 器 杯 接 完 形	口-12.9 稜-13.8 高- 3.8	3 住-10に同じ	口縁内外面横ナデ。底体部外面は削り状の篋ナデを施す。	密。赤色粒を含む。良明 赤 褐色	やや粗な作り。床面・貯蔵穴中
3 住 13-12	土 師 器 杯 接 完 形	口-13 稜-14 高- 4.1	短い口縁は大きく内傾し、稜は丸い。底体部は丸く、底は平底ぎみ。	全体に光沢のある篋磨きを施し、特に底体部外面は細い篋磨き。	緻 密 良好 明 赤 褐色	内面底体部に線刻×印2ヶ所有る。床面出土
3 住 13-13	土 師 器 杯 完 形	口-11.3 稜-12.75 高- 3.5	口縁は内傾し、口唇はコ字状となる。受部はやや鋭さを増す。	全面に光沢のある篋磨きを施す。	緻 密 良好 明 赤 褐色	内面に×印あり。床面出土
3 住 13-14	土 師 器 杯 接 完 形	口-12.6 稜-13.85 高- 3.4	口縁は内傾し、稜は僅かに突出する。底体部は浅く、丸底である。	内面と口縁外面は篋磨き、底体部外面は削り状の篋ナデ。	緻 密 良好 明 赤 褐色	覆土
3 住 13-15	土 師 器 杯 1/3	口-(13.5) 稜-(15) 高-3.8+	口縁は内傾し、受部の稜は明瞭に突出する。底体部は、丸底となる。	口縁内外面と内面は、丁寧な篋磨き、底体部外面は、篋削り。	密。赤色粒含む。良。暗褐色	覆土
2 住 13-16	土 師 器 杯 1/2	口-12.2 稜-13.9 高- 3.3	口縁は内傾し、受部稜はやや明瞭。底体部は浅く、丸底である。	口縁外面横ナデ。他は全面篋磨きを施し光沢あり。	緻 密 良好 褐 色	覆土
2 住 13-17	土 師 器 杯 4/5	口-12.9 稜-14.6 高- 3.75	3 住-15に同じ	口縁内外面横ナデ。内面篋ナデ。底体部外面篋削り。	砂粒含む。普通赤褐色	内面と口縁外面は丹彩略床面+5

3 住 13-18	須 恵 器 蓋杯 (蓋) 1/4	口-(14.5) 高-2.7+	口縁はやや短かく、開 き下降する。天井部は 欠くが、全体に浅い。	天井部の篋削りは広く 口縁直下にまでおよぶ。	密 良 好 暗 青 灰 色	断面色は薄いチ ョコレート色。 覆土。
3 住 13-19	須 恵 器 高杯 一部欠く	口-12.5 基- 4 底-11.8 高-16.2	口縁は外傾し開く。体部には2ヶ所突出する稜 を有す。脚は長脚二段二方透で、大きく外反し 開く。端部上下に摘みシャープである。		小白色砂粒 含む。良好 暗 青 灰 色	床面出土
3 住 14-20	土 師 器 鉢? 3/4	口-12 基-13.9 底- 6 高- 9	碗に須恵器蓋杯の身を 接合した特異な形状を 呈する。	底部以外全面に篋磨き を施し、特に内面は丁 寧である。	緻 密 良 好 明 赤 褐 色	壁溝内出土
3 住 14-21	土 師 器 高杯 4/5	口-15.7 基- 5 底-12.7 高- 9.3	杯体部にく字状の稜を 有し、口縁は外傾し大 きく開く。	器表面全体に篋磨きを 施し、脚内面篋削り、 脚口縁端は横ナデ。	緻 密 良 好 明 赤 褐 色	カマド覆土
3 住 14-22	土 師 器 甕 接 完 形	口-16.3 胴-16.1 底- 6.2 高-17	口縁は肉厚で外反し開 く。胴部は丸身を有し 底部に至る。平底。	口縁内外面は強い横ナ デ。胴外面は削り状の 篋ナデ。内面は篋ナデ。	砂粒多い。 普 通 淡 赤 褐 色	カマド左袖上
3 住 14-23	土 師 器 壺 4/5	口-18.6 胴-24 底 7 高-24.4	口縁は外反し大きく開 く。胴最大径は上位に あり、腰高である。	口縁内外面は強い横ナ デ。胴外面は削り状の 篋ナデ。内面篋ナデ。	微砂粒含む 普 通 乳赤色	覆土+ 5～25
3 住 14-24	土 師 器 甕 上半 1/3	口-17.4 胴-19.1 高-21.3+	口縁は大きく外反し開 く。胴最大径は下位に ある。胴長。	口縁内外面横ナデ。胴 外面篋削り。内面篋ナ デ。	砂粒多く含 む。普通。 暗 黒 褐 色	作りが雑である。 床面出土
3 住 14-25	土 師 器 甕 上半 3/4	口-28.5 高-16.6+	口縁は大きく外反し、 端でやや下降ぎみ。胴 部は漸次的にすばまる。	口縁内外面横ナデ。胴 部外面丁寧な篋削り後 線状の磨き。内面荒磨	砂粒多く含 む。良好。 明褐色	床面出土
3 住 15-26	土 師 器 甕 口縁 1/4	口-(25) 底- 8 高-25.5	3 住-25に同じ	3 住-25に同じ	3 住-25 に同じ	覆土+15
3 住 15-27	土 師 器 壺 1/2	口-23.5 胴-31 底- 8.5 高-32.4	口縁は大きく外反し、 開く。胴部は球状を呈 す。底部はやや丸身あ り。	口縁内外面横ナデ。胴 は上半が篋削り。下半 篋ナデ。内面篋ナデ。	微砂粒多く 含む。普通 褐 色	胴部内面中位に タール状の付着 物有り。カマド 右袖上。
3 住 15-28	須 恵 器 広口壺 1/3	口-22.8 頸-16.4 胴-45 高-41 +	口縁は外反し、頸部に 二条の沈線を巡らす。 胴は肩が張り、球状を 呈す。	胴部外面は平行叩き目 後カキ目を巡らす。内 面は円心円文となる。	細粒含む。 良 好 青灰色	床面出土
4 住 17-1	土 師 器 杯 一部欠く	口-14.1 高- 4.0	口縁は外反ぎみに開く。 体部稜はシャープに作 り。底部は丸底である。	内外面全体に光沢のあ る荒い不規則な篋磨き を施す。	緻 密 良 好 暗褐色	底部外面に線刻 ×印あり。 床面出土
4 住 17-2	土 師 器 杯 口縁 1/3	口-(15) 高- 3.5+	口縁は強く外反に開く。 体部稜は強くシャープ に作る。底部は丸底。	4 住-1に同じ	緻 密 良 好 明褐色	略床面+ 8

4 住 17-3	土 師 器 杯 接完形	口-13.5 高- 3.7	口縁は僅かに内湾ぎみに開いて立つ。体部稜は僅かに突出。浅い底体。	内面と口縁外面は強い横ナデ後、部分的に筥磨き。底体外面は、筥ナデ。	緻 密 普 通 黒 色	内外面黒色処理 略床面+ 8
4 住 17-4	土 師 器 杯 接完形	口-13.5 稜-14.3 高- 4	口縁は内傾し立つ。体部稜は、く字を呈す。底体部は丸いが平底ぎみ。	4 住- 3 に同じ	緻 密 普 通 黒 色	内外面黒色処理 覆土+10
4 住 17-5	土 師 器 杯 口縁 1/3	口-(13) 稜-(13.8) 高- 2.7+	短い口縁は内傾し立ち。体部稜はく字状を呈す。底体部は浅い。	器表面全体に擦へり不明瞭で、底体部外面は筥ナデ?	微砂粒質。 普 通 明褐色	覆土
4 住 17-6	土 師 器 杯 1/3	口-(14) 稜-(15) 高-(4.1)	口縁は内傾し立つ。受部状の稜はやや明瞭につくる。底体部は丸い。	内面と口縁外面は強い横ナデ後部分的に筥磨き。底体外面は筥ナデ。	密 普 通 暗 黒 褐 色	内面と口縁外面 黒色処理。底部 に×印あり。略 床面+ 5
4 住 17-7	土 師 器 杯 底欠く 1/2	口-13.7 稜-14.8 高- 3.7+	4 住- 6 に同じ	内面と口縁外面は光沢のある丁寧な筥磨きを施し、底体外面筥ナデ。	密。赤色粒 含む。普通 明褐色	覆土
4 住 17-8	土 師 器 鉢 1/2	口-18.4 胴-19.5 高- 8.9	口縁は短かく内湾ぎみに内傾す。底体部は張り底部は底平化する。	口縁内外面横ナデ。底体部内外面筥ナデで、部分的に弱い磨きを施す。	砂粒を含む。 普 通 淡褐色	床面出土
4 住 17-9	土 師 器 高杯 杯部 1/3	口-(22) 高- 6 +	肉厚の口縁は外傾し、端部で僅かに外反する。体部は漸次的にすぼむ。	内面は弱い筥磨き。外面は磨き状の筥ナデ。	密で微砂粒 を含む。普 通。淡褐色	カマド内
4 住 17-10	土 師 器 甕 一部欠く	口-18.2 胴-18.5 底- 6.3 高-28.4	口縁は外反し開く。胴長の胴部はやや丸身を有し、底は平底。	口縁内外面強い横ナデ胴外面筥削り、内面は筥ナデを施す。	砂粒を多く 含む。普通 暗 赤 褐 色	床面出土
5 住 20-1	土 師 器 杯 1/3	口-(14) 高- 3.6	肉厚の口縁はやや外傾し、体部がやや張り、浅い底体とつながる。	内面と口縁外面は強い横ナデ。底体部外面は削り状の筥ナデ。	密 普 通 暗 茶 褐 色	覆土
5 住 20-2	土 師 器 杯 3/4	口-14.2 高- 4.55	肉厚の口縁は外反し、体部に鈍い稜を有す。底体部はやや深く丸底。	口縁内外面筥ナデ。体底部内面は筥ナデ。底体部外面削り状のナデ。	密。微砂粒 含む。不良 褐 色	覆土
5 住 20-3	土 師 器 杯 1/2	口-15 高- 4.1	口縁は外反し開き、体部稜は僅かに突出し、底体部は丸い。	全面に粗い不規則な磨きを施し、やや光沢がある。	赤色粒多く 含む。良。 暗褐色	底部外面に線刻 ×印あり。 覆土+23
5 住 20-4	土 師 器 杯	口-(14.5) 高-3.5+	口縁はやや外傾し、稜は突出する。底体部は浅い。	口縁内外面筥磨き、内面底体は磨き状の筥ナデ。外面弱い筥ナデ。	密 普 通 暗褐色	黒色処理の可能 性あり。 覆土
5 住 20-5	土 師 器 杯 1/3	口-(15) 稜-(14.5) 高- 3.8+	口縁は内傾しやや短く立つ。受部状の稜は突出する。	口縁外面は強い横ナデ、内面筥磨き。底体部外面は、削り状の筥ナデ。	緻 密 良 好 淡 暗 褐 色	床面出土

5 住 20-6	土 師 器 杯	口-(13) 稜-(14.5) 高-3.8+	口縁は短かく内傾し立ち、受部稜は突出する底体部はやや浅く丸底。	口縁は内外面篋磨き。内面は丁寧な磨き。底体部荒い篋磨き。	緻 密 良 明褐色	覆土
5 住 20-7	土 師 器 杯 1/2	口-(14.5) 稜-(15.5) 高- 3+	口縁は擬似口縁で短かく内傾する。稜は明瞭に作り、底体部は浅い。	内面と口縁外面は丁寧な磨きを施す。底体外面はナデ状の篋削り。	緻 密 良 好 淡褐色	底内面に強い磨きで火印を表す。 覆土+20
5 住 20-8	土 師 器 杯 完形	口-13.65 大-13.9 底- 5.8 高- 5	口縁は僅かに内湾し立つ。底体部は肉厚で、深く、底は平底である。	外面に輪積み痕を残す。口縁外面と内面は横ナデで内底には荒い磨きを施す。	砂粒多く含む。普通。 暗褐色	覆土+20
5 住 20-9	土 師 器 杯 口縁1/3	口-(17) 大-(17.3) 高- 5.3+	口縁は僅かに内傾し、底体部は深く、全体に肉厚である。	口縁内外面強い横ナデ。体部内面篋ナデ、外面削り状のナデ。部分磨き。	砂粒多い。 普 通 暗褐色	覆土
5 住 20-10	土 師 器 高杯 杯部1/2	口-(22) 高- 5.1	全体に大ぶりで、口縁は内湾ぎみに開く。口縁直下に沈線を巡らす。	全面丁寧な篋磨きを施し、やや光沢がある。	緻 密 良 好 暗黒褐色	内面黒色処理 覆土+20
5 住 20-11	土 師 器 高杯 脚部1/2	高- 8.1+ 底-(11)	やや長めの脚で、大きく開き、端部はコ字状で、口唇部に条線を有す。	外面は丁寧な磨き状のナデ。内面は篋削りで端部は横ナデ。	密。微砂粒含む。良。 暗褐色	覆土
5 住 20-12	土 師 器 高杯 脚部1/2	高-5.2+ 高-11.5	短脚で、肉厚である。大きく外反し開く。	外面は粗い磨き、内面は篋ナデ。端部は横ナデを施す。	密 良 暗黒褐色	外面黒色処理？ 覆土
5 住 20-13	土 師 器 高杯 脚	高-14.4 底-(16)	長脚で大ぶり。柱状の体部より急激に外反し開き、端部は上方に向く。	外面は磨き状の強いナデを丁寧に施し、端部は強い横ナデ。	密 良 赤褐色	外面丹彩を施す。 覆土+23
5 住 20-14	須 恵 器 蓋杯 (蓋) 口縁は一部	口-(14.5) 高- 4.3	天井部は丸く、やや開きぎみに下降する。	天井部外面の篋削りは雑で、内面天井部に僅かに格子状当具の痕あり。	白色小砂粒含む。普通 暗灰色	覆土
5 住 20-15	須 恵 器 蓋 天井のみ	高-2.9+	天井部は丸く、中央が窪んだ偏平なつまみを有す。	天井部の篋削りは全面におよび丁寧に仕上げる。	白色小砂粒含む。普通 暗灰色	覆土
5 住 21-16	土 師 器 甕 上半分	口-18.2 胴-20.2 高-17.7+	口縁は大きく外反し開き、胴部は丸身を持ち、胴長である。	口縁内外面横ナデ。胴部外面篋削り。内面篋ナデを施す。	砂粒多く含む。普通。 暗褐色	覆土+20
5 住 21-17	土 師 器 甕 上半分	口-19.8 胴-18.3 高-12.5+	口縁は大きく外反し開き、胴長の胴部は直線的に下降する。	5 住-16に同じ	5 住-16 に同じ	覆土+22
6 住 23-1	土 師 器 杯 完形	口-14.5 高- 4.15	肉厚の口縁は外傾し開く。底体部は丸身を呈し、丸底である。	口縁内外面と内面は、弱い磨き、底体部外面は篋ナデを施す。	赤色粒を含み密。良。 暗褐色	床面出土

6 住 23-2	土 師 器 杯 3/4	口-14.6 高- 4.1	口縁はやや外傾し立ち、 底体部は浅く、丸底で ある。	内面は丁寧な篋磨き。 口縁外面は部分的に磨き。 底体外面は削り状のナ デ。	密 普 通 淡褐色	床面出土
6 住 23-3	土 師 器 杯 接完形	口-14.3 高- 3.4	口縁は僅かに外反し立 ち短い。稜は僅かに突 出し、底体部は丸く浅 い。	口縁内外面と内面は、 やや強い横ナデ。底体 部外面はナデ状の削り。	赤色粒を含 む。普通。 淡褐色	床面出土
6 住 23-4	土 師 器 杯 完形	口-13.8 高- 3.55	6 住-3 に同じ	全面光沢のある丁寧な 篋磨きを施し、光沢が ある。	緻 密 良 好 暗黒褐色	内面黒色処理。 内面 米 ・外面× 印あり。略床面 + 8
6 住 23-5	土 師 器 杯 完形	口-14.2 高- 3.7	6 住-3 に同じ	内面不規則な篋磨き。 底体部外面は篋削りで 底部は雑に磨く。	赤色粒を含 む。普通。 暗褐色	略床面出 + 7
6 住 23-6	土 師 器 杯 一部欠く	口-14.65 高- 4.1	6 住-3 に同じ	口縁外面と内面は丁寧 に篋磨き。底体部外面 はやや雑に磨く。	赤色粒を含 む。普通。 褐 色	床面出土
6 住 23-7	土 師 器 杯 完形	口-14.5 高- 4.25	肉厚の口縁は微に外反 し立ち。底体部は丸底 となる。	全面にやや丁寧な磨き を施し、光沢がある。	緻 密 良 好 暗褐色	略床面出土 + 8
6 住 23-8	土 師 器 杯 一部欠く	口-12.7 稜-13.8 高- 4.8	口縁は内傾し立ち、体 部稜はく字状を呈す。 底体部は丸底でやや深 い。	口縁内外面と内面は不 規則で丁寧な磨き。底 体部はやや雑な磨き。	密 良 暗茶褐色	略床面出土 + 5
6 住 23-9	土 師 器 杯 完形	口-13.1 稜-14.9 高- 3.9	口縁は微に外反ぎみに 内傾し、稜は鋭いく字 を呈す。底部は浅く丸 い。	全面に荒い篋磨きを施 す。	緻 密 良 好 暗褐色	略床面出土 + 6
6 住 23-10	土 師 器 杯 完形	口-13.1 稜-14.8 高- 4.9	口縁は内傾し立ち、受 け状の稜は明瞭に作る。 底体部はやや深く丸い。	口縁内外面と内面は丁 寧な篋磨き光沢あり。 底体部外面篋削り。	6 住-9 に 同 じ	略床面出土 + 10
6 住 23-11	土 師 器 杯 接 完 形	口-12.6 稜-14.2 高- 3.9	口縁は内傾し立ち、受 け状の稜は明瞭に作る。 底体部は丸底となる。	全面に弱い不規則な篋 磨きを施す。	緻 密 良 淡褐色	覆土 + 12
6 住 23-12	土 師 器 杯 完形	口-13.7 胴-15.7 高- 4.2	6 住-11 に同じ	内面・口縁外面は丁寧 な磨き、底体外面は丁 寧な篋ナデを施す。	緻 密 良 暗褐色	略床面出土 + 5
6 住 23-13	土 師 器 杯 一部欠く	口-13.5 胴-15.55 高- 3.7	全体に薄く、口縁は内 傾し、受部稜は明瞭で 端部はやや上方に向く。	全面光沢のある篋磨き を施す。	赤色粒を含 む。良好。 暗黒褐色。	全面黒色処理か ？底部外面に線 刻×印あり。 覆土 + 15
6 住 23-14	土 師 器 杯 接合完形	口-12.5 胴-13.4 高- 4.0	口縁は内傾し、体部稜 はく字を呈し、全体に 薄く、底部は丸底。	内面・口縁外面は横ナ デ。底体部外面はナデ 状の篋削り。	微砂粒含む。 不 良 暗褐色	床面出土

6 住 23-15	土 師 器 杯 接完形	口-12.9 稜-14.2 高- 3.7	口縁は内傾し立ち、受 部稜は丸身を持って鈍 く作り出す。	内面・口縁外面は横ナ デ。底体部外面は削り 状の筥ナデ。	緻 密 普 通 淡褐色	略床面出土
6 住 23-16	土 師 器 杯 完形	口-12.4 稜-13.4 高- 4.4	口縁は内傾し、受部稜 は丸身を持つ。底体部 はやや深く、丸底。	全体にやや雑な筥磨き を施す。	微砂粒含む。 普 通 暗黒褐色	内面に線刻によ る×印あり 覆土+10
6 住 23-17	土 師 器 杯	口-12.7 稜-14.3 高- 3.9	口縁は内傾し、短かく 立ち。受部稜は丸身を 持って作り出される。	6 住-15に同じ	密 普 通 淡褐色	黒色処理の可能 性がある。 略床面出土+ 5
6 住 23-18	土 師 器 杯	口-(13.4) 稜-(14.8) 高- 3.1	口縁は短く内傾し、立 つ。稜は丸身を持ち、 底体部は浅く、丸底。	6 住-15に同じ	密 普 通 淡褐色	床面出土
6 住 23-19	土 師 器 杯	口-13.6 稜-15.4 高- 4.25	口縁は内傾し、体部稜 はく字状で僅かに突出 する。	口面・口縁外面は弱い 磨き、底体部外面は削 り状の筥ナデ。	密 良 好 暗黒褐色	口縁外面と内面 黒色処理の可能 性あり 略床面出土+ 8
6 住 23-20	土 師 器 杯	口-12.3 稜-13.4 高- 4.3	口縁は内傾し立つ。体 部稜は鈍いく字状を呈 す。底体部は丸く深い。	全面に筥磨きを施し、 光沢がある。	微砂粒を含 む。良好。 暗褐色	口縁外面と内面 黒色処理 略床面出土+ 4
6 住 23-21	土 師 器 杯	口-13.9 稜-14.5 高- 4.25	口縁は僅かに内傾し体 部に張りがあり、底体 部はやや深く、丸底。	全面に丁寧な筥磨きを 施す。	微砂粒を含 む。良好。 暗褐色	覆土+14
6 住 24-22	土 師 器 高杯 一部欠く	口-16.8 基- 4.5 底-11.6 高-14.2	杯部は直線的に外傾し 大きく開く。脚は開き 下降し、大きく外反す る。	杯部口縁内外面は強い 横ナデ。体部内外筥ナ デ。	緻 密 良 明赤褐色	内外面丹彩 覆土+10
6 住 24-23	土 師 器 鉢 一部欠く	口- 9.6 胴-13.0 底- 6.2 高- 9.8	口縁は体部より内湾し 内傾し立つ。胴部は球 状を呈し、底部は平底。	外面は丁寧な筥ナデ。 内面上半分は磨き、下 半分は筥ナデ。	微砂粒を含 む。普通。 淡赤褐色	外面丹彩の可能 性あり。 床面出土
6 住 24-24	土 師 器 甕 上半分½	口-14.4 胴-14.3 高-11.6+	肉厚の口縁は大きく外 反し開き、胴部は僅か に丸身を有し、下降す る。	口縁内外面横ナデ。胴 部外面筥削り、内面筥 ナデ。	砂粒を多く 含む。普通 暗赤褐色	床面出土

第3章 ま と め

今回の調査は、大作地区団体営農道整備事業の一環として行ったもので、道路建設と言う限られた面積の調査であるにもかかわらず、断続的ではあったが古墳時代前期～奈良・平安時代までの各時代にわたる住居跡7軒の他に数多くの遺物を検出し、成果は多大であった。

東区より検出した古墳時代前期の住居跡については、出土遺物も少なく1軒のみの検出であり、集落跡としての広がりやを推定しうる複数の検出ではなく推論の域を出ないが、上総地域における古墳時代前期の住居跡が1軒単独で検出されることはまれで、複数の検出による集落跡として存在することを考え合せば、1号住居跡が集落の一部として想定できる。また、同様に奈良～平安期の所産と考えられる7号住居跡は、西区の北端に1軒のみ検出し、上総地域の同時期の住居跡の存在を考えるならば、逆に1軒単独の存在が強くなろう。

今回の調査で主体を占めたのは、2～6号住居跡の5軒の古墳時代後期の住居跡である。5軒の住居跡は、全掘したものはなかったものの、多種・多量の遺物を出土し、6世紀末より7世紀初頭を中心とする、半世紀ほどの期間のものであろう。遺物は、3・6号住居跡より良好な状況で多量に出土し、3号住居跡出土の20の鉢は口縁部に受部を有する特異な器形を呈し、また19の須恵器長脚二段二方透の高杯も住居跡からの出土は少なく、いずれも当地域において希薄な遺物である。6号住居跡より出土した21個の土師器杯は、その検出状況も特異であるが器形的にもバラエティーに富み、ほとんどが床面からの出土で、同時期の一括資料としてあつかえるものである。

古墳時代の5軒の住居跡には、4→3号住居跡の切り合い関係もあり、主軸方位の相違や土師器杯・須恵器杯の型式変化が見られる点など考慮に入れるならば、2期の変遷が可能である。住居跡は土師器杯より、2・4・6→3号住居跡の変遷が可能であろう。

今回の調査は、下ヶ谷台遺跡の一部分の調査で遺跡全体を論じるのは速急であり、今後の当地域での調査の増加を待たなければならないが、この地に古墳時代前期の集落跡存在の可能性や6世紀後半に突如として現われた集落の存在を確認できたことは、多大の成果である。

今後この大作地区における開発行為は増加するものと考えられ、それに比例し歴史解明の資料も増し、今回の調査成果もその一躍を担うことになろう。

最後に、今回の調査に御協力をしていただいた関係諸機関ならびに直接発掘作業や整理作業に従事された方々に深く感謝申し上げます。



下ヶ谷台遺跡周辺の航空写真

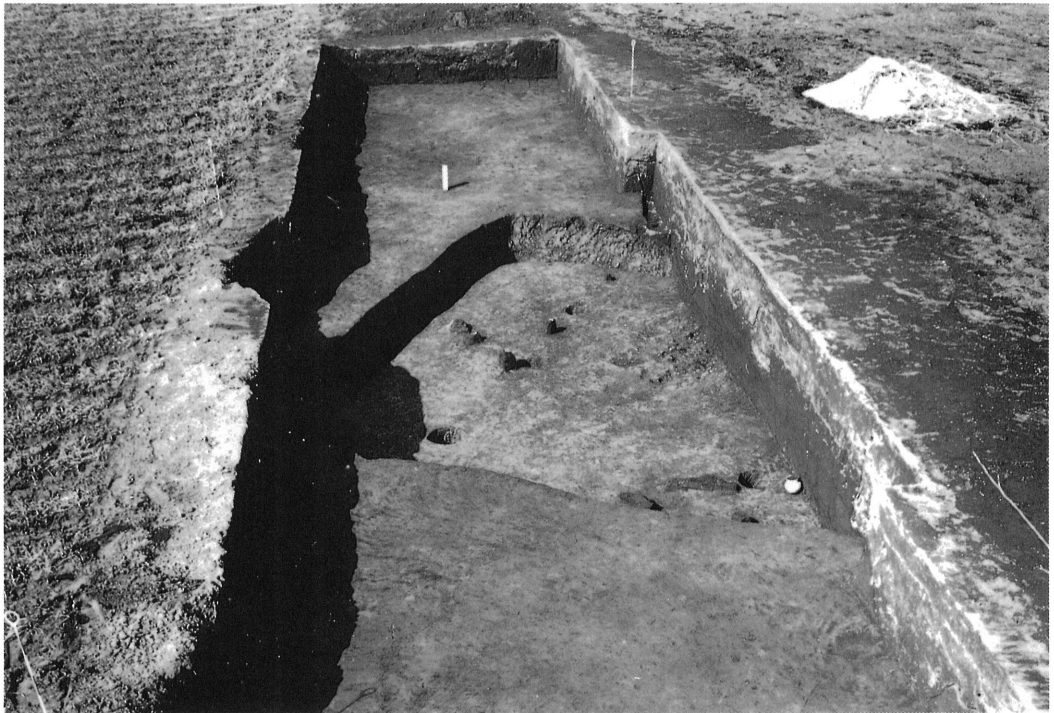
図版 2



下ヶ谷台遺跡遠景（東から）



確認調査風景



1号住居跡全景（東から）



1号住居跡遺物出土状況

図版 4



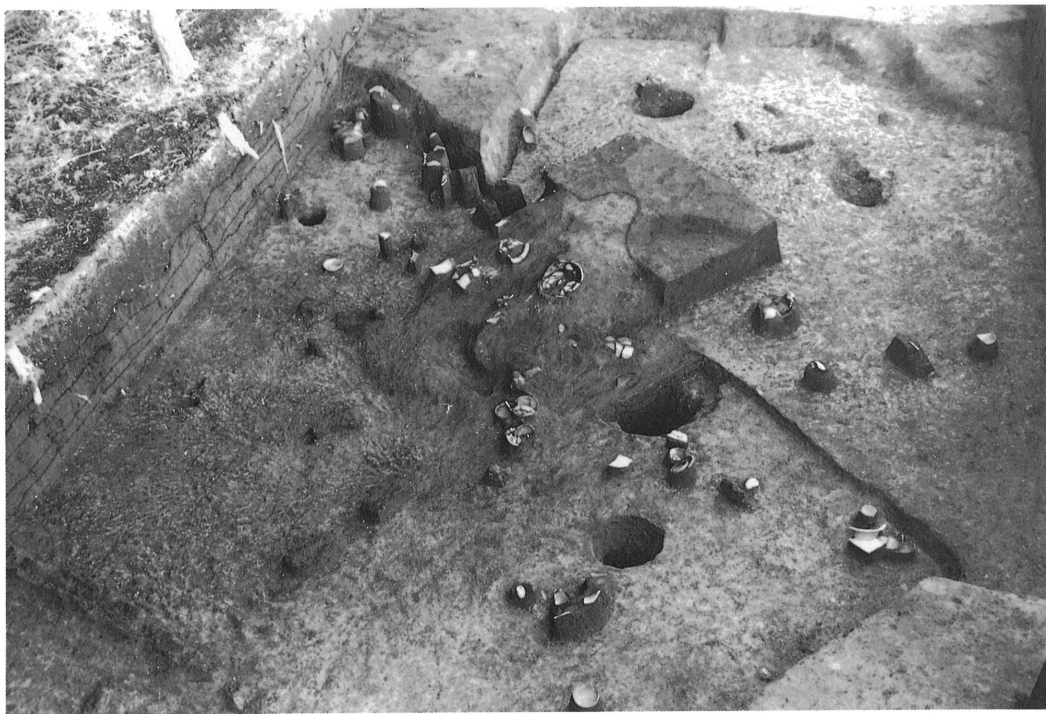
2号住居跡全景



2号住居跡カマド検出状況



3・4号住居跡全景（南から）



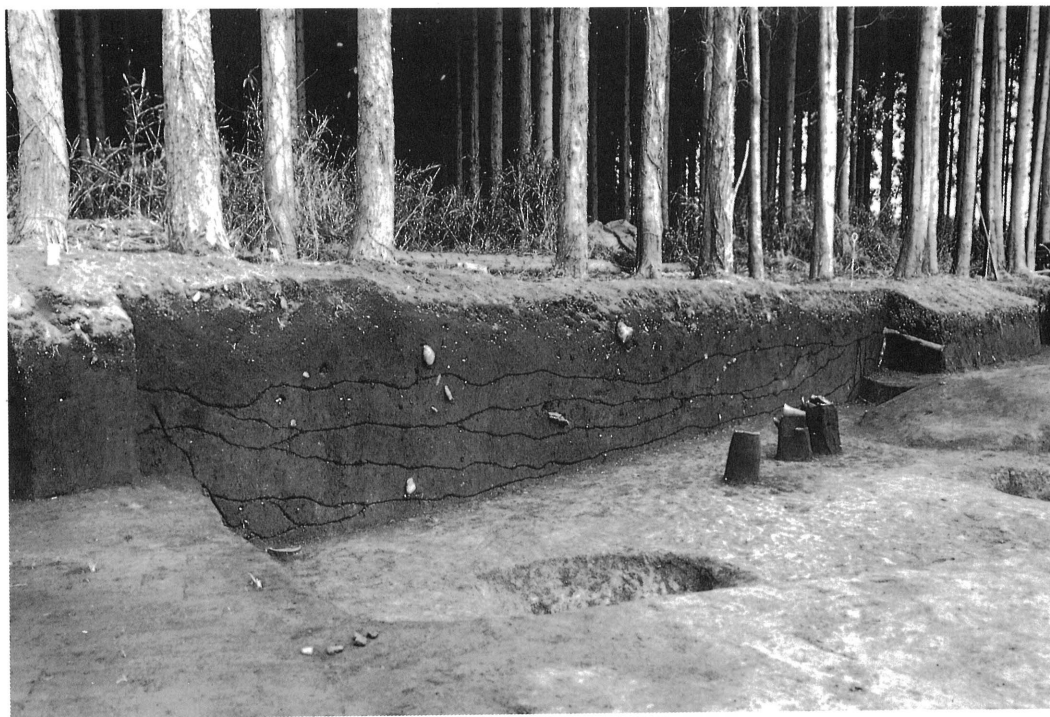
3・4号住居跡遺物検出状況



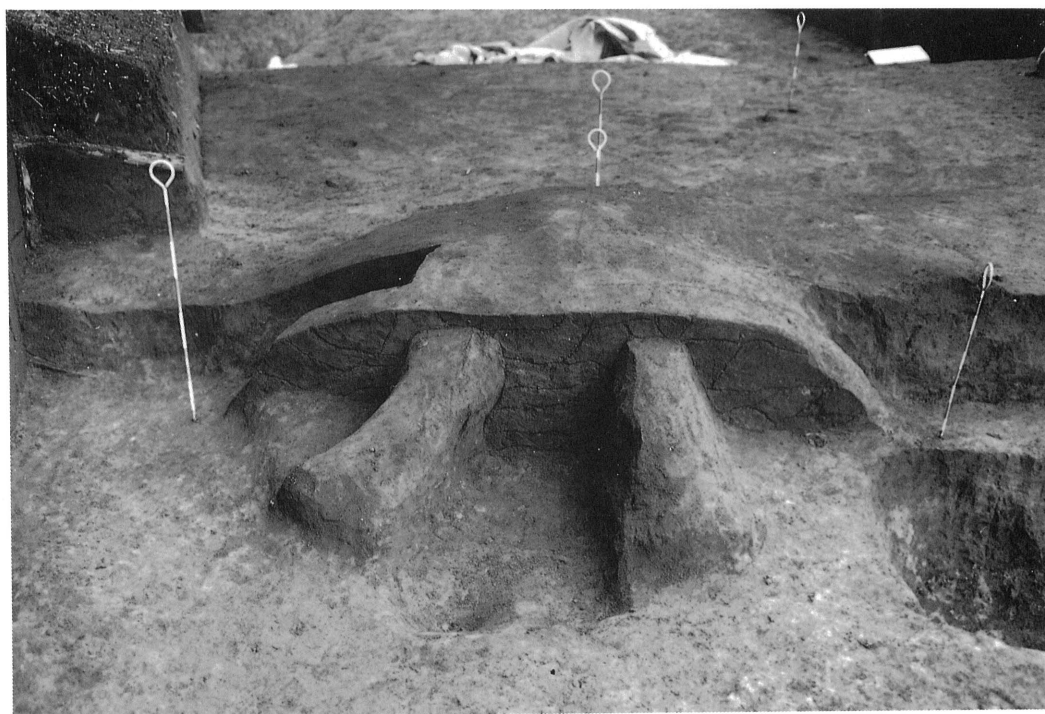
3号住居跡カマド調査状況



5号住居跡全景（南から）



5号住居跡土層堆積状況



5号住居跡カマド調査状況



6号住居跡全景（南から）



6号住居跡遺物検出状況

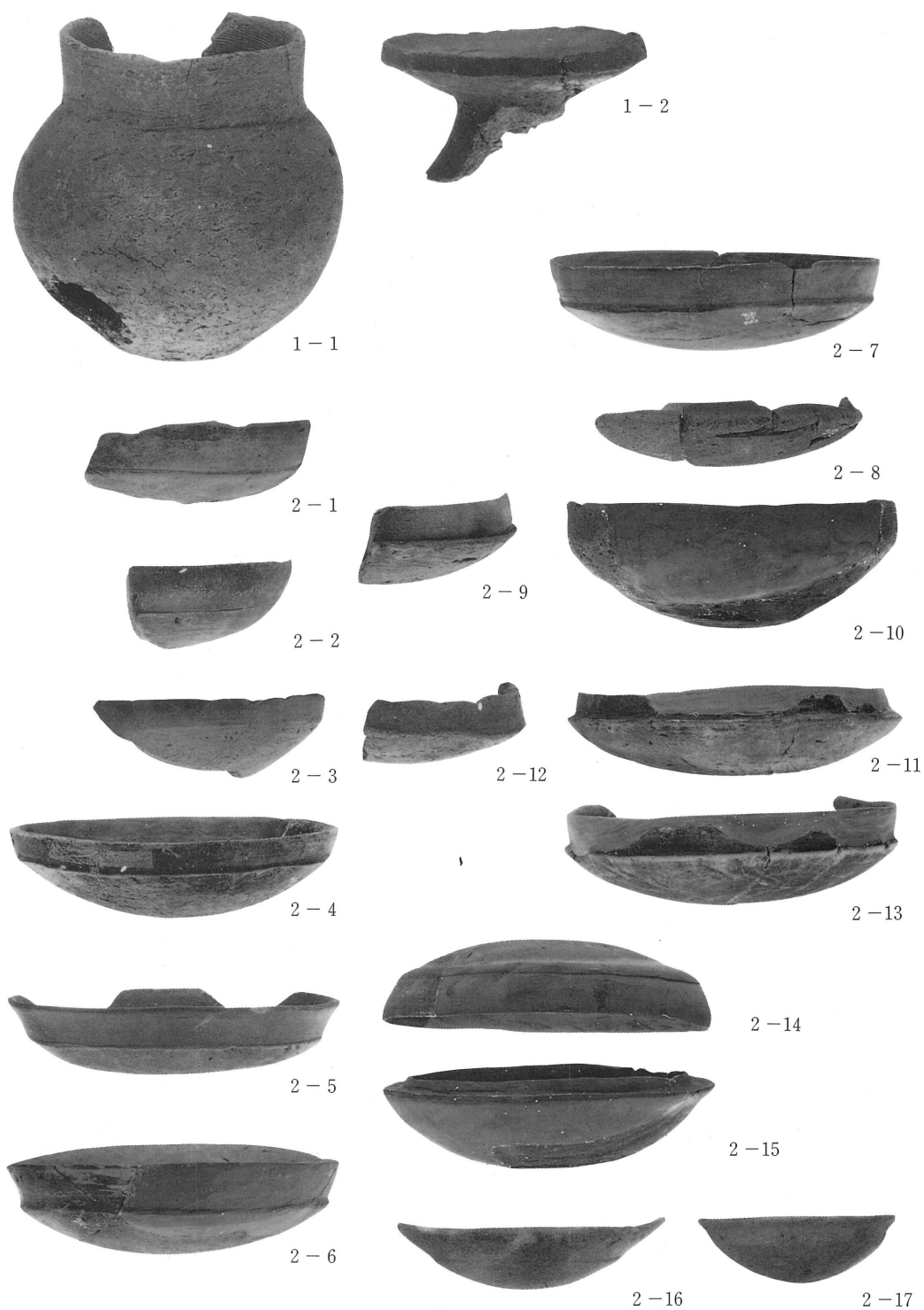


6号住居跡遺物検出状況

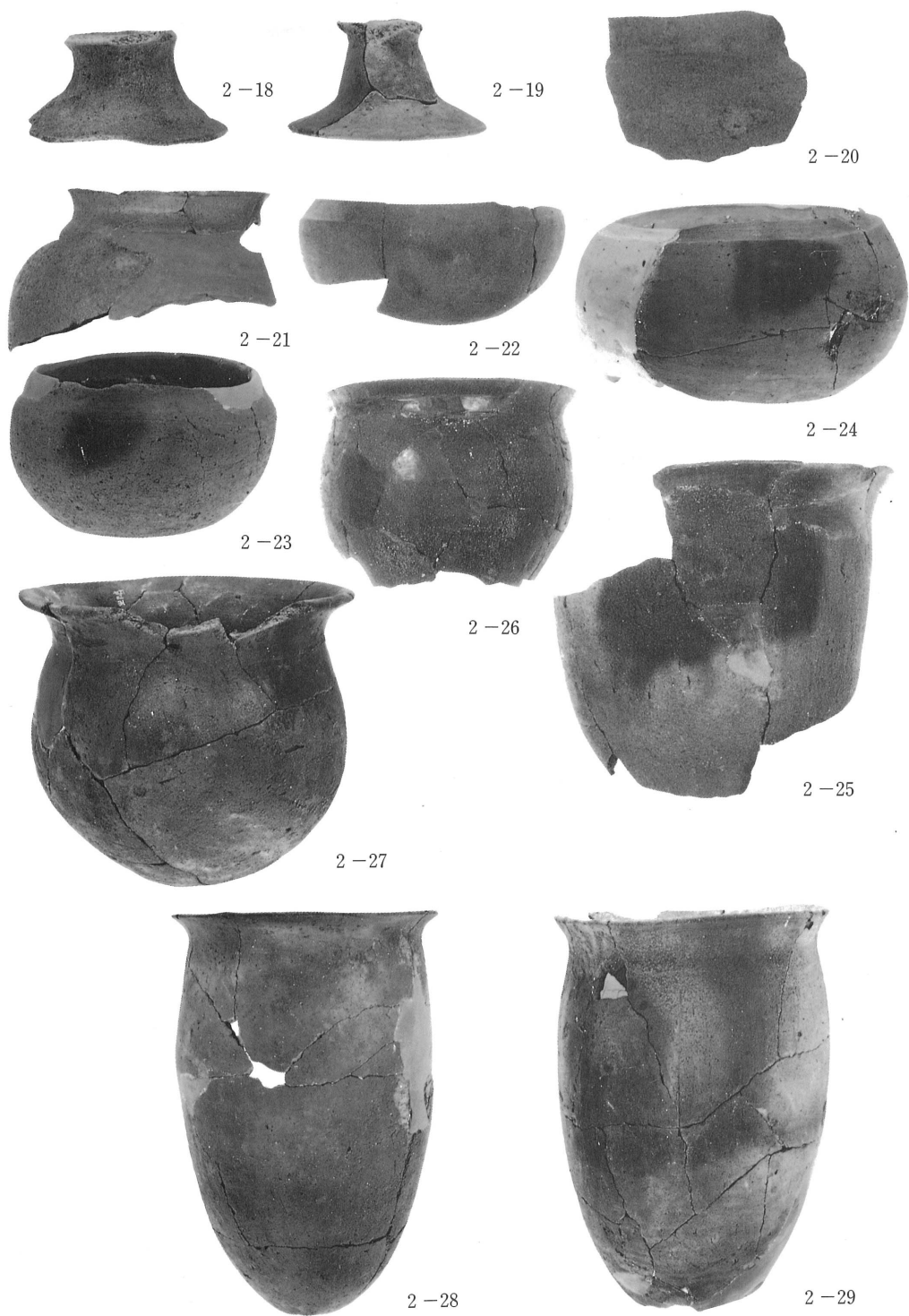


7号住居跡全景（西から）

图版10



1号住居跡(1~2)・2号住居跡(1~17)出土遺物



2号住居跡出土遺物 (18~29)

図版12



3-1



3-6



3-2



3-7



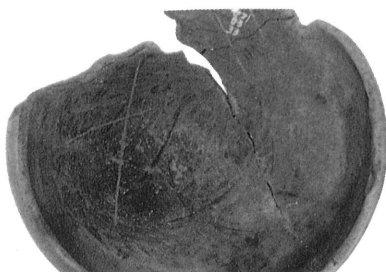
3-3



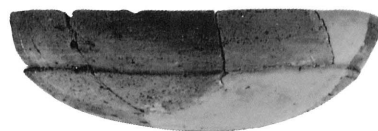
3-8



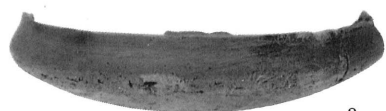
3-4



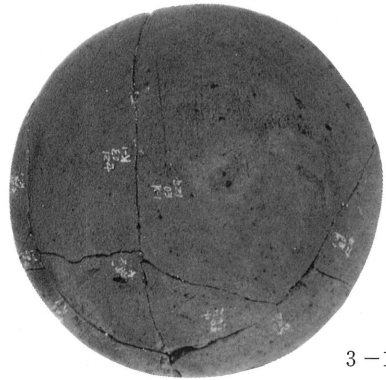
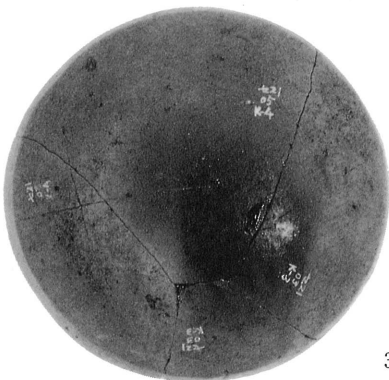
3-9



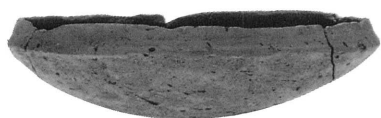
3-5



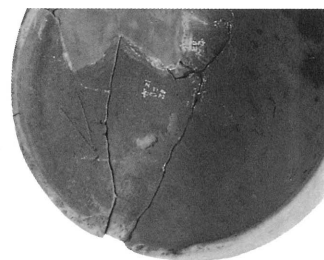
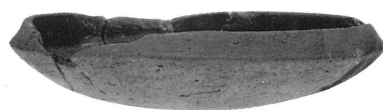
3-10



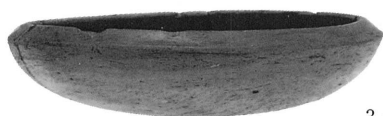
3号住居跡出土遺物（1～10）



3-11



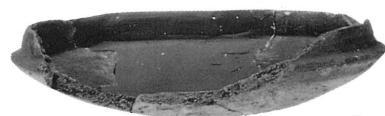
3-14



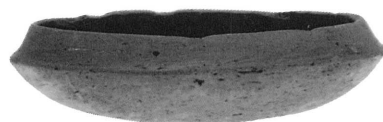
3-12



3-16



3-17



3-13



3-15



3-18



3-19

图版14



3-20



3-21



3-24



3-22



3-25

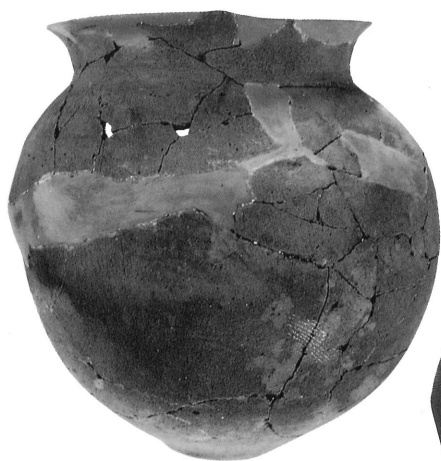


3-23



3-26

3号住居跡出土遺物 (20~26)



3-27



3-28



3-29



3-30



3-31

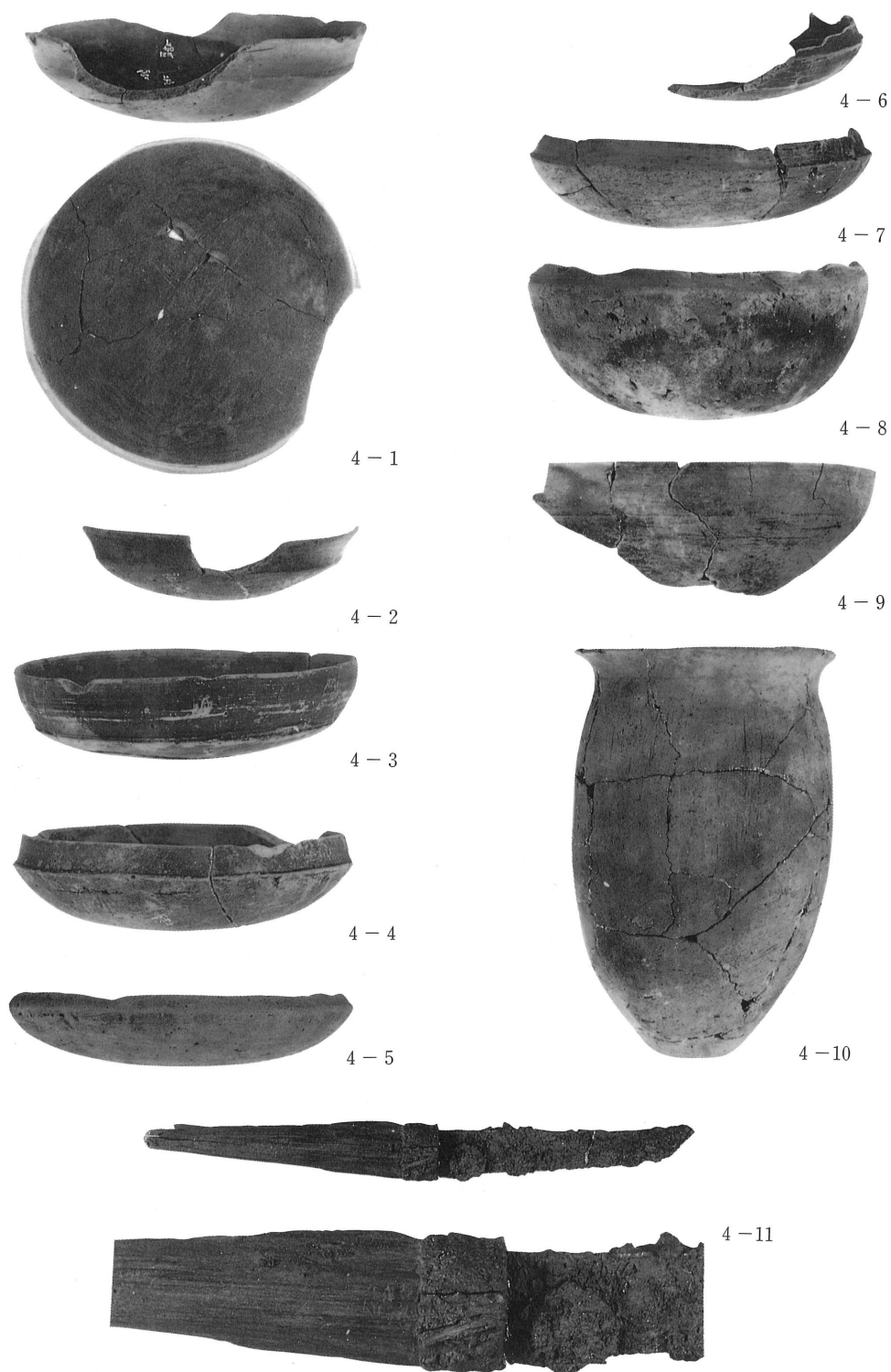


3-32



3-33

図版16

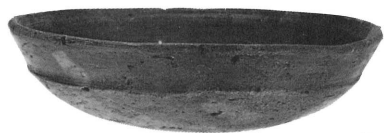


4号住居跡出土遺物（1～11）

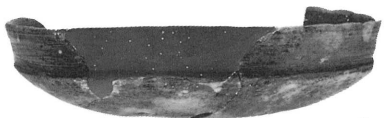


5号住居跡出土遺物（1～17）

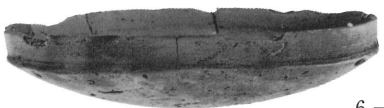
图版18



6-1



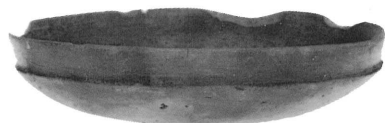
6-2



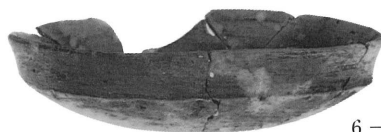
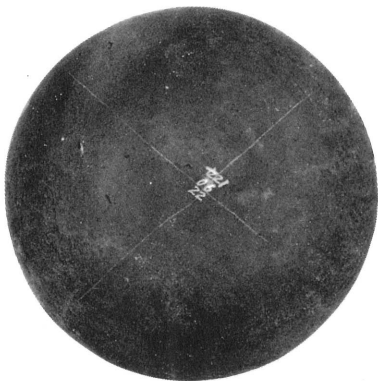
6-3



6-4



6-5



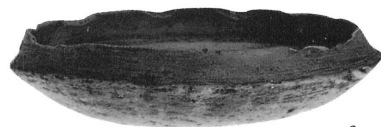
6-6



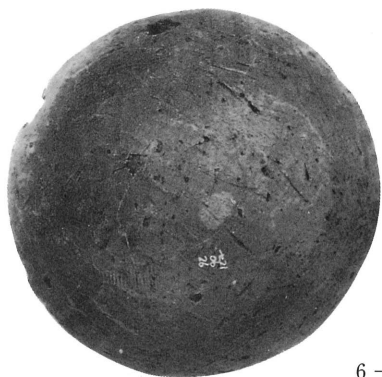
6-7



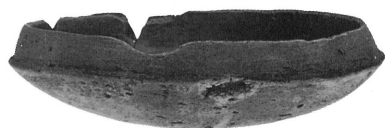
6-8



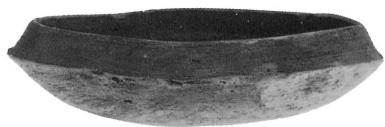
6-9



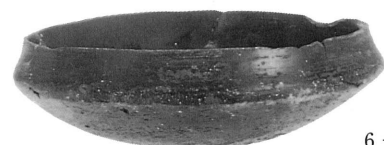
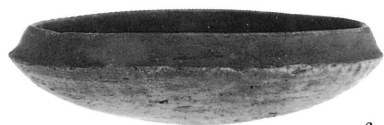
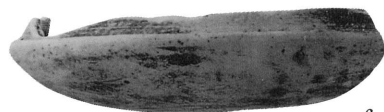
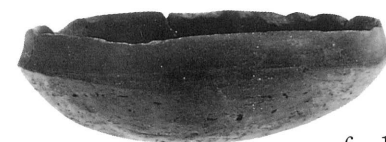
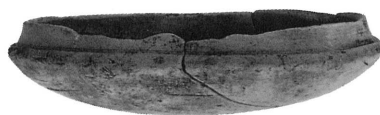
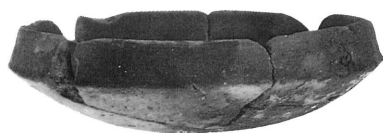
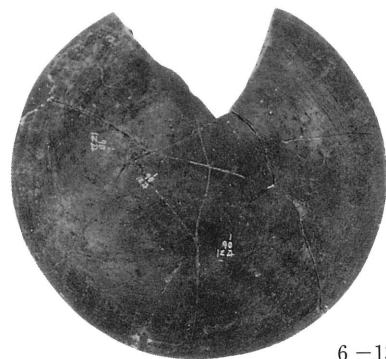
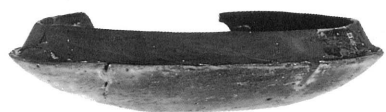
6-10



6-11



6-12



6-13

6-14

6-15

6-16

6-17

6-18

6-19

6-20

6-21

6-22

6-24

6-23

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第18集

——千葉県市原市——

下ヶ谷台遺跡

昭和62年 3 月25日 印刷

昭和62年 3 月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市原市都市部農業土木課

財団法人 市原市文化財センター

〒290-02 千葉県市原市馬立817番地

T E L 0436 (95) 2755

印 刷 三 陽 工 業 (株) 市 原 支 店

千葉県市原市五井5510の1

T E L 0436 (22) 4348